
istletoe 戦場のもみの木の下で IS学園、最後の一年間 セカンド・シーズン
黒野 萌音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The kissing under the mistletoe 戦場のもみの木の下で IS学園、最後の一年間 セカンド・シーズン

【ZPDF】

N4719U

【作者名】

黒野 萌音

【あらすじ】

シャルロット・デュノア IS学園、最後の一年間 のセカンド・シーズンです。ついに心を通い合わせることが出来た一夏とシャルロット。ヒロインズ達それぞれの思惑はあるけれど、でもこれから二人の幸せな日々が始まる はずだったのに……。絡み合う人と人の思惑。蠢く、黒い気配。世界は次第に捻れ、歪み、そしてシャルロット達をも巻き込んでいってしまう。

亡国機業 キャラクター設定

スコール・ミューザル

亡国起業のリーダーです。本作品では原作よりも黒キャラ設定です。

専用機：ネーム イズ キャット

エム（織斑マドカ）

亡国機業のHースパイロット。本作品では今後の原作設定お構いなしで

一夏君の兄弟です。使用するHSの関係でセシリ亞から勝手に宿敵扱いされます。

専用機：サイレント・ゼフィルス

オータム

亡国機業のHS乗りの一人。ザ・ヒールキャラです。原作の感じのままいく予定

ですが、ちょっと影が薄いかも。プロットにあまり出てきてくれません。

専用機：アラクネ？

ジャンヌ・ウェーバー

「国機業のIS乗りの一人。口調や笑い方に特徴のあるヒール
その2なキャラです。

自分を含めた人間の苦痛に快感を覚えるイタイ性質をお持ちで
す。

専用機・テンペスタ・ドウ工改

ラウラ・ボーデヴィッヒ

「国機業のIS乗りの一人。試験管ベビーであるラウラちゃん
とまつたく同じ遺伝子
から創られたクローンさん。ラウラちゃんのことを「姉さん」
「失敗作」と呼び、
廃棄と称しラウラちゃんの命を狙っています。

専用機・シュヴァルツェア・ナーゲル

アメリカトウ・プラハ

「国機業のIS乗りの一人。褐色の肌と腰まで伸びる漆黒の髪
の長身。

一本のダガーを使つた独自の近接格闘術を得意としています。
非常に無口な子です。

専用機・ディガ・タファール

オリガ・ニゴラーエワ

「国機業のIS乗りの一人。金髪のベリーショート、青い瞳。

普段はメガネを

かけちります。生真面目な性格で、オータムやジャンヌとはそりが合いません。

一人称が『俺』な娘っ子です。

専用機：イジマシ＝SV

ネーム イズ キヤツト

「のHIIについてはもうちょっと秘密で……。

アラクネ？

ズズメバチ型のHIIです。当然、針の一刺しは強力ですが、伸

縮自在の6本脚と

粒子散布によるセンサーの攢乱攻撃も強力です。原作で破壊されてしまった

アラクネのヴァージョン・アップ版の機体。

サイレント・ゼフィールス

原作の設定どおりです。ちなみにこの機体つてミステリアス・レイディや

シルバリオ・ゴスペルに並び、元々最強な気がする……。

テンペスター・ドゥ工改

第二世代型のカスタムタイプです。長大な槍を使ったヒット・アンド・アウエイを唯一の攻撃方法としています。他のスペックを徹底的に排除することで、結果的に亡国機業イチのスピードを誇ります。ワンオフ・アビリティー

『ブンタ・ディ・ディアマンテ』で、前方からの攻撃に対し高い防御力を発揮するエネルギー・シールドを開闢します。

シュヴァルツェア・ナーゲル

シュヴァルツェア・レーゲンの姉妹機。巨大な鎌と、両肩に搭載されたパンツァーシュレックで中・近距離戦を得意とします。最大の武器は、先行して造られたシュヴァルツェア・レーゲン、ツヴァイク両機の運用データから完成した、半径5mほどの全方位型AICです。

ディガ・タフアール

一本の短剣『ミセリコルデ』とワンオフ・アビリティー『マハイ・アヴァターラ』(ハイパー・センサーだけが感知する幻覚を発生させ、分身する

時に錯覚させる)

を操り、白兵戦を得意とします。相手が遠距離型のISの場合はともかく相性の悪い、ちょっとバランスを欠いた機体です。

イジマシ=SV

対IS用狙撃ライフル『SV-IS』を装備。有効射程距離500m、シールドバリアーを

貫通してほぼ直接絶対防御にダメージを与えるこの武器と、AI（人工知能）を搭載した実体シールドを駆使した超遠距離戦法を得意とします。

プロローグ

The gunpoint founder .

この作品は『シャルロット・デュノア IS学園、最後の一年間』のセカンド・シーズンです。前作をお読みいただいている前提で書かれておりますので、キャラクター等の設定説明は本文に入りません。

また、キャラクターの設定や世界観は、ほとんどを原作『IS インフィニット・ストラトス』より引き継いでおりますが、『2年後』という作品の設定性質上、必ずしも同一ではありません。原作7巻の途中までをもとにしたストーリーですが、エピローグを含むその後の原作とは一切関係のない『パラレルワールド』を舞台としております。

最初の音が聞こえたとき、シャルロットは風船が割れたか、もしくは車のタイアがパンクしたのかと思った。ただ、最近のタイアは音を立てて破れることがほとんどないから、『一体、なんだろう?』くらいに彼女も軽く考えていた。

けれど次の爆発音が聞こえた時、バスの角度が変わった。

前輪の方が沈みこみ、後輪の方が浮き上がる。
ガクンッと揺れた車内。突然の出来事でパニックに陥った女子達の悲鳴が響く。

車両の先頭に座っていた教師たちが立ち上がり叫んだ。何かを必死で指示しているが、まったく聞こえてこない。

それでも、シャルロットは落ち着いていた。

自分の周囲の生徒に、まずは落ち着くように声を掛け、それぞれがまた周りの生徒に同じことをしたあと、身を低くして待機するように声を掛ける。

普段からの人望に厚く、また自由国籍を取得した専用機持ちである彼女の言葉は、周囲の女子たちにとつて非常に信頼のおけるものだつた。そしてものの数分で、車内は一旦静寂に包まる。

が

ドンッ！ ドンッ！ と今度は爆発ではない、発砲音が車両の前部に響き渡る！ ！

再び車内はパニックに陥り、女子たちの金切り声や悲鳴で溢れ返つた。

そして。

バガーン、と鈍い音がして、バスの昇降口の扉が壊された！ そしてそこから何人もの黒ずくめの人間が侵入していくッ！

「F r e e n e ! ！」 男の声で一人が叫んだ。最初に入ってきた黒ずくめだ。その手には拳銃が握られていて、黒ずくめはそれを振りかざし、車内の生徒たちに向けて激しく叫びながら威嚇した。

生徒たちは半狂乱で叫び、泣きわめく。

しかし黒ずくめが天井に向けて撃つた3発の弾で、あっけなくその声は、止んだ。

あとに彼が叫んでいる言葉は、よく聞き取れなかつた。ただ、身振りで『手を上げる』と言つてゐるようで、生徒たちは全員歯向かわずに頭の上に手をのせていた。彼らもそれ以上、発砲はしなかつた。英語だと、シャルロットは思ったのだが、何故か随分聞きづらい。訛り、というよりインтоネーションが違うのだ。けれども、彼女にとつてその言葉が持つ音は、聞き覚えがあるもので……妙に不思議な気がした。

目を閉じて、シャルロットは考えた。

車内の黒ずくめは全部で3人。ひとりはハンド・ガン。残りの二人はアサルト・ライフル。

僕なら やれないことは、ないッ！！

シャルロットがついに『ラファール・モアノー』を展開しようとしました、その時だ！

昇降口から突如黒ずくめの応援が現れた！ 4人……いや、5人！

！ 総勢8名の武装集団が彼女達の乗るバスを占拠する。

シャルロットはEJを呼び出すのに、集中しようと呑んだひと息をそつと吐き出した。

そのまま深いため息を付く。　　これでは、彼女も手が出せない。

例え『ラファール・モアナー』を使って黒ずくめを打ち倒したとして、自分はEISの絶対防御に守られて無傷だろう。けれど、間違いなく多くの死傷者が出る……。

今は、様子を見るしかない。

シャルロットは車内をバタバタと動き回る黒ずくめ達に気を配りつつ、みんなの表情にも目を走らせる。

スッ、と肩口に気配を感じて、彼女が振り返ろうとしたその時だった。

『ブシューーッ！』

突然、シャルロットの顔目掛けてスプレーのようなモノが浴びせられたッ！！

ハッと息を呑んで、すぐに『しまった』と思つた。

後悔するより先に、あっけなく瞼が閉じる。電源をOFFにしたみたいに意識が途切れる。

何故、気付かなかつたんだろう？

こいつらの、……黒ずくめの目的はバスジャックじゃない。

僕だ。

荒っぽく振り回される体。

空と地面が、何度も行ったり来たりする。

そのうち景色は空と海が交互になり、最後は暗い穴に押し込められる。

彼女の唇が最後の力で三文字を紡ぐ……

黒野です。

スマセンでした。未完成のものをこ migliorandoして改訂版になります。よろしくお願いします。

「一夏ッ！！」

普段は絶対に他の生徒がいる場所で名前を呼ばない千冬がそう呼んでしまったのは、そうしてしまつほどの緊急事態に違いなかった。一夏もそれはすぐにわかった。

何故なら耳に飛び込んできたさつきの音は、間違いない、爆発音！しかも、それは悪意のある『兵器』によるモノだ。これは、おそらくは何者かによって計画された事態なのだ。

「ああ、わかつてゐよッ！」

そう言つて一夏は立ち上がり、昇降口まで走る時間も惜しく、横の窓を全開に開けた。

振り返り見やると、さつきまでの悄然とした表情は全部消え去り、緊迫した面持ちのセシリア・オルコットがいる。彼女の顔を見た一夏も、頭の中が熱を帯びてくるのがわかる！

「行くぞ、セシリアッ！！」

「ええ、準備は出来てましてよー！」

一人は直感していた。これは 絶対にまずい何かが起きている！

そう、心臓の鼓動が告げていた。早鐘のように、鳴り響いていた。

「白式！！」

乗り出した窓を力一杯蹴り飛ぶと、一夏は叫ぶ。瞬間、まばゆい光に体は包まれる。

そして粒子変換の光の粒は、瞬きの次の瞬間には白銀の巨大なスラスター翼に姿をかえた。

ドンッ！

耳をつんざく爆音を残して、白式は一気に最高速まで加速。その後ろには、メタリック・ブルーの輝く機体がピッタリと付いてくる。

……煙が、見える。

それがぐんぐん近づく。白式の速度なら、ものの数秒でたどり着くはずだ。なのに、一夏は妙に焦っていた。そして

「くつ、……！」

痛みでもなく、よくわからない刺激のために彼は自身の胸を押さえつけた。何かが、胸を裂いて出てくるみたいだ。

（なんだ？！　この胸の奥からこみ上げてくるみたいな……これつて、なんだ？　気持ちが悪いな……）

一夏はその『正体不明の何か』が理解できないままに、白煙の立ち上る『危機』の真上に到着してしまう。

実は　それこそが、この先に起きた最悪の事態を知らせる『虫の知らせ』みたいなものだったことに、この瞬間の一夏は気付くはずもなかつたのだが。

セシリ亞が息を呑むのが聞こえた。

煙は、さつきまで自分達のバスが走っていた橋から上がっていた。橋桁から数箇所、橋杭からも数箇所。

そして、橋の中央辺り、橋桁の一部30mほどが

斜めに

今にも落ちかかっているッ！！

「い、一夏さん！　あそこッ、バスが！－！」

セシリアがその落下しそうな橋桁の上にバスを発見して指さし、叫んだのと、

「一夏ッ！ お前は、何をグズグズしている…… セリ亞とバスを移動しろッ……！」

ハイパー・センサーにビューが映り、ラウラがもの凄い形相で叫んだのは、ほぼ同時だった。

センサーが素早く一段階の望遠を行い、漆黒の機体 シュバルツ・レーゲンを捕らえる。

落下しそうな橋桁を前に、右腕を突き出した姿。

「ラウラッ？！」

一夏が叫ぶ声に、彼女はすぐには返事が出来ないでいた。センサー越しになんとか振り返った彼女の横顔が見えた。血管が浮き出るくらいに真っ赤で、その上、苦悶の表情を浮かべていた。そして、

「一夏…… セリ亞、しろッ！ もう…… そんなには、もたせられないのだ……」

絞り出した、必死の声。

一夏は気付いたッ！

ラウラは『アクティフ・イナーシャル・キャンセラー A I C』によつて、落下しようとする橋桁全体を必死で停止させていたのだ。しかしそれは明らかに『A I C』の許容限界重量を越えた、オーバーパワーだった！

「ぐうッ！』

耐えかねたラウラの苦悶の呻きと共に、橋桁がガクンッと角度を変えた。

「ラ、ラウラッ？！」

そして バスがッ！ 斜面のようになつた橋桁を滑り落ちるようになッ！

「一夏のーッ！』

支えを失うように落ち始める橋桁。しかし間一髪、橋桁の下に滑り込む、黒い影。

次の瞬間、エネルギー・シールドの展開を示す大きな光が橋を下から支えた！

「鈴ツ！」

「鈴さん！」

「ぎぎぎぎぎつ……！ ち、ちょっと、バカ一夏にロール女つ！ さつさと、バスを移動させなさいよーーー！」

鈴の甲龍だ。大出力の『大天黒牌』が土壇場でバスの危機を救った。それでも、決して予断は許さない！

「セシリ亞、行くぞツ！」

「ええつ！！」

二機は橋桁の上に取り残されたバスに向かつて飛んだ。

ガラガラツ……

次第に崩壊が始まり、不安定な橋桁に取り残されたバス。一夏とセシリ亞は辿り着いて、その状態に息を呑む。

もう、 いつ崩れてもおかしくない橋桁。からうじて横転せずに入るバスの車体。

「…………つ？！」

血の氣の引いた顔で身を強張らせるセシリ亞を、一夏は急き立てる。

「急げ、セシリ亞！！」

一夏がバスの前方に、セシリ亞が後方に取り付く。

「みんな、もう大丈夫だ！ しつかり掴まっている、すぐに安全なところに移動するぞ」

一夏は車内に向かつて叫ぶ！ 安心させようと、出来るだけ平静を保つて言つたつもりだが、一体どのくらいそれが出来たのか。考える余裕すら、本当は一夏にはなかつた。

けれどもフロントガラス越しに目を合わせた女子生徒達の顔が、恐

怖から 希望や安堵に変わるのが。

「よし、セシリ亞。バスを移動する」

「了解しましたわ！」 そう言つてセシリ亞はバスの底部を両手でしつかりと掴む。「……いつでも行けますわよ、一夏さんッ！」

一夏もバンパーの下に手を突つ込み、持ち上げる。「ああ、いくぞ

車体の傾きに注意して、一機のパワーバランスを揃えて、……慌てるな、集中しろ！ 一夏は、そう自分に言い聞かせ、白式のスラスター出力を上げていくつ！

集中しろ！ 集中しろッ！ 一夏は、何度も自分に言い聞かせるように呟く。

その時！

「織斑君、大変ッ！！」

ひとりの生徒が突然窓を開けて一夏に向かつて叫んだ！

ぐらつ……

一瞬、集中を削がれた形になつた一夏は、左のスラスターの出力バランスを失敗する。

「キヤツツッ？！」

窓から放り出されそうになつて慌てる彼女。

「あつ、危ないッ！！ 今はダメだ、すぐに窓を……！」

「でも！ ……でもッ！！ 大変なの。本当に大変なのッ……！」

その生徒は自分の身の危険を感じてなお、叫ぶように一夏に何かを伝えようとしていた。

「……すぐに安全な場所に移動する。話は必ずその後に聞くからッ！」

だが、一夏も必死だつた。事態は一刻を争うのだ。

「急いでッ！ ……ラウラも鈴も、もう長くはもたないんだッ！」

「う、うん、……わ、わかったわ」

一夏の言葉に押され頷く彼女の顔は、しかし随分と沈痛な表情だつ

た。よっぽど重要なことなのかもしれない。……が、今はびついても時間が惜しい！

「セシリアっ！」

「ええっ！ 行きますわよーーー！」

一機のエレバスをしつかりと支えながら、ゆっくり上昇を始めた。

一夏とセシリアは、ゆっくりとバスを移動する。

最初こそ不安定だつたが、飛び立つてしまえば割と安定を保ちやすかつたのが一夏にとつては救いだつた。時速10kmくらいのスピードで慎重に飛行しながら、バスを下ろせそうな場所に向かつて移動する。一人が目指したのは、橋を渡りきつた先の道路だ。緩やかに曲がる左カーブがあり、上下線が各一車線ずつ、さらに上り側には登坂車線もあつた。一時避難にはもつてこいの場所だつた。

肉眼でその場所を確認できるくらいの距離まで近づいた時だつた。ハイパー・センサーにチャンネルが開き、簪の顔が映り込む。

『どうした、簪?』一夏が訊ねると、簪はほんのちょっとだけ眉をしかめて困つた顔をした。

『4台目が急ブレーキで止まつたところに、……5台目が追突したの。……それほどスピードが出ている時じやなかつたから、重傷者はいないけれど……何人かは自力で……移動できない生徒がいる』
『わかつた。こつちが片付いたら、すぐに行く』

一夏はチャンネルを閉じる。

『セシリア、聞いていたか?』バスの後ろをかかえて飛行するセシリ亞に、通信を切り替えて言った。

『もちろんですわ。重傷者はいないと言つていましたけれど、……怪我をした方はいるということですわよね……』

『急ごうッ!』

『ええ』

もう眼下まで迫つた道路には、先に橋を渡りきつたバスの1、2号車が止まつていてる。

そしてその横には2機の黒いI-Sの姿。甲龍とそのすぐ脇、肩を抱かれてぐつたりとしているシユバルツア・レーゲンが待機しているのが見えた。

あのプライドの高いラウラが顔も上げられないくらいに消耗している。一夏はそれほど負担をラウラ一人に負わせてしまったことに胸を痛めるが、その彼女の奮闘こそがこの惨事を未曾有の惨事から救つたのだ。さすがはドイツの生んだエース・パイロット。彼女の素早い判断と、決断力には自分なんかまだまだ及ばない、と敬服した。

一人のエスの脇に着地する。そしてかかえていたバスを静かに地面に下ろすと、車内を一度見回した。特に異常はなさそうだ。窓から覗く顔にはさつきまでと違い、安堵の表情が浮かんでいる。それを見た一夏も、いくらか胸の中の重しが軽くなつた気がした。

『鈴！』

それほど距離があるわけではなかつたが、一夏はチャンネルを開いて鈴と通信を行う。

『ここを……任せても大丈夫か？』

いくつかの意味を含んだ言葉だつた。

ラウラのこと。移動してきたバスのこと。その中の生徒達。もちろん無事だつた2台のバスのこともそうだ。

そして何よりこの事態が襲撃によって起こつた可能性が高い、といつこと。一夏達が離れた後の手薄なところを狙われることだつて十分に想定できるのだ。

そうなつた時のこと。 鈴に預けようとしているモノは大きかつた。

けれど。

『さつさと行きなさいよッ！ ここはあたしが見てるわ』

こともなく返す鈴の返事は、勢いや口先だけのものではないのだと彼女の眼は語つていた。

『了解』

鈴は一夏を顎で追い払う。

普段はまっすぐにしか進めない車のおもちゃみたいに『思い立つたらストレーント』を地でいく少女なのに、どうしてかこうこう有事

の際は頼りになる。別人みたいに視野が広くなつて、誰よりも冷静に物を見る。一夏は彼女のそんな、ギャップのある性質が嫌いではなかつた。

いや、鳳 鈴音という少女まるまるがむしろ好きだつた。

白式のスラスター推力を上げると、彼女の影はどんどん小さくなつていく。目で見えなくなつてもまだ、彼女の視線を背中に感じているような気がした。

ものの数分で簪のいる4号車と5号車の場所にたどり着いた。

『簪ツ』

着陸するやいなや、一夏は叫んだ。

『……大きな怪我人はいない……。一番怪我がひどいのは……5号車のドライバー……、でも生徒も頭を強く打つた子がいるから、歩いて移動するのはムリ……』

地面を滑るように打鉄式式を移動して近づいてくる簪。

『そうすると、またバスごと移動させるしかないですかわよね?』

『……そうだな』

のぞき込んできたセシリアの顔に振り向いて言つ、一夏。簪も頷いた。

『簪を入れてもエス3機か。出来るだけ時間は掛けたくないけれど、やつぱり一往復するしかないのか……』一夏が顎に手を当てて思案しながら言つ。

すると簪が怪訝そうに返した。

『3機つて……、簪もいるけれど……?』

彼女が指さして示す先には、紅椿の真紅のボディーが陽光を浴びてキラキラと輝いていた。メタリックの装甲が、雲の加減で変わ一日差しによって乱反射したみたいに見える。

そして操縦者の　　全くの無表情の顔が一夏達の方に向けられていた。

篠ノ之箒の形をした、無機質な。まるで紅椿のパーツの一つみたいにして、一夏の視線を感じても反応しないその顔。

『…………』

一夏の目がゆっくりと移動していく、最後に箒の目を捉えた。けれどもその瞳に彼女の表情は映らない。センサーの一部みたいに対象を認識しただけで、過去のデータと照合するとそれが『白式』であり、『織斑一夏』。彼女の閉ざした心にはそれ以上の情報は必要がないかのような様子だ。顔色一つ、変えることはなかった。

『ほう、き…………?』

一夏は小さく、彼女の名前を口にした。その声が届いたのか届いていないのかは、結局彼女の表情からは読み取れなかつた。

飛び立つ四機のIIS。

一台のバスを、それぞれ一機の機体が持ち上げて移動する。

一夏の相方はさつき同様セシリ亞だ。一度目と比べて随分と安定感を増した作業。おかげで後ろを飛ぶ簪、簪の二人組とは少しづつ距離が開いていく。しかし、一夏はそのことに気づいていなかつた。

一夏の回線が開き、そこにセシリ亞の顔が映し出された。

『一夏さん、ちょっとスピードを落とした方がいいかと思いますわ。後ろのお一人のサポートもしてさしあげないと……』

『あつ……。ああ、そうだな。悪い、セシリ亞……』

『別に謝ることでもないですわ、一夏さん。このわたくしとあなたのペアが誰よりも優れているのは自明の理。言つてみれば、当然の結果でしてよ』

そういうて、ふふんと鼻を鳴らすセシリ亞。

『……それより一夏さん。なんだか顔色がすぐれないように見えますが、お加減でも悪いのですか？ もし、そうでしたらこのセシリア・オルコット、戻り次第手厚い看病をさせていただきますわよ！』

真剣な眼差しを回線越しの一夏に向ける、セシリ亞。しかし、

『…………』

『一夏、さん？』

一夏は答えなかつた。じつとセシリ亞の顔を見つめたまま何度も唇を動かそうとするが、結局、それは言葉にはならなかつた。

複雑な表情をした。音にして、口にしてしまえば胸の中はもう少し軽くなるのだろうが、織斑一夏という男は不器用だ。そう簡単にはいかない。その様が全部表情に出ていた。そしてその意味をセシリ亞は取り違えた。

『……もうつ。恋人が出来た途端にそんなつれない態度なんて、あんまりですわ』

セシリ亞はぶつつ、と頬を膨らました。

『ええ、ええ。冗談ですとも！ お気になさらないでくださいまつー！』

彼女ははつんとすると、回線を切つてしまつた。

そんなつもりはなかつたのだが、誤解を解く元氣も出でこなかつた。

ただ、いつもより弱くなつていた彼の心は、そんなセシリ亞のちよつとの一言でも小さな傷になつた。

痛みとは違つ疼きが、胸の奥の方でした。

ピッ。

『ちょっと一夏あ！ アンタ、何、やつてるの！ セツセと戻つてきなさいよーーー！』

突然、ハイパーセンサーに飛び出したのは鈴の顔。いつも以上にでつかい声を出すものだから、さすがに一夏のくさくさした気分も一発で吹き飛んでしまつた。

『な、なんだよ、鈴。そんなにでつかい声じやなくたつて、お前の声ならどこからだつて聞こえるぞ』

『ンンン！ なんかムカつくリアクションね……つて、そうじやなくつてー！』

と、続きを言おうとする鈴の回線を無理矢理端のほうへ追いやつて、ラウラが回線をつないできた。

『ぐだらんやり取りをしている場合か！ 一夏、緊急事態だ。すぐに戻れ』

ピッ、とたつたそれだけ言つてラウラと鈴の回線は切れてしまつた。

『お、おいつ！ はあー、一体なんなんだよ……』

一夏が眉間に皺をよせてため息をつくと、再び開いたセシリ亞の回線が神妙な面持ちの彼女を映した。

『……ラウラさん、何か様子が変でしたわよね？』

『ん？ ああ、確かにそうかもしれないが……』

続けてちょっと不満を口にしようとする一夏を、セシリアの言葉が遮る。

『一夏さん、急ぎましょ。わたし、何か嫌な予感がしますわ』

『……どうした、セシリア？』

『わかりませんが、いつこう時のわたくしの勘は当たってしまうことが多いのですわ。何もなければいいのですけれど……』

そう言って目を伏せるセシリア。彼女の表情を見ていると次第に自分のなかにも不安が膨らんでき、一夏は表情を固くした。

『急ごう、セシリア！』

『はい……』

二人は慎重に機体の速度を上げた。

「ドンッ——！」

「待て、一夏ッ！ 戻れ、バカモノッ！ —」

ラウラの声など一切耳に入らず、一夏は全速力で飛び立つてしまう。

「バカがッ！ 閻雲に探し回つたつて見つかりっこないのだ！ クソッ——！」

珍しく苛立ち露に地団駄を踏むラウラ。しかし疲労した体がいうことを効かずにつラフラとして膝を付く。

「ちょっと、ラウラ！」

鈴が駆け寄つて肩を貸した。

「でも、こんなことになるなんて……」

セシリ亞がぼそつと咳く。

「アンタね、よくそんな悠長に構えてられるわね？！」

鈴がそんなセシリ亞に喰つてかかった。しかし、セシリ亞は動じない。

「こういつ時こじや、冷静さを失えばすべてを失うのですわ。……ですから、一夏さん。その行動は正しくないですわ。それこそ相手の思うツボ……」 そう言つて、下唇を噛む。

「みんな、ちよつと……」

不意に咳いた簪に、ギュッと四人全員の視線が集まつた。「うう……とほんの一瞬、腰の引ける簪であつたが、今回はそうもいつていられない。

「おかしい……。『ア・ネットワーク』上に、シャルロットの反応が見付からない

「あつ……」セシリ亞が素早くハイパーセンサーをフルスクリーンで開いて確認した。「ない。……おかしいですわ、確かにこの地球上にも、それに宇宙空間を探しても……いない。そんな……」突然、ラウラの血相が変わつた！

「まずい！！ 誰か、一夏を呼び戻せッ！」

見たこともないくらい目が血走つていた。奥歯を噛み締める音がギリギリと聞こえるようだつた。彼女の美しい顔が歪んだ。「早くしないと手遅れになる……。急いで一夏を連れ戻さないと……」

彼女の口から出る言葉は、その握り締めた拳と同じくらい震えていた。事の重大さを、ようやく全員がラウラと同じ高さで理解した！ パアーッと光の粒子が弾けて、すぐにそれは漆黒の機体へと変わる。

『あたし、一夏を連れ戻してくる！』

『鈴さん、わたくしも一緒にいたしますわ！』

すぐ横にブルーメタリックの装甲が姿を見せた。

『いくわよ！』

『ええ！』

二機はスラスターの推力を全開で飛び立つて行く。
見送るラウラと篠。

その横で篠は、六枚の空中投影ディスプレイを呼び出し大量のデータと膨大な量の数字を相手にすでに戦い始めていた。

一 夏は他の専用機持ち達同様、状況を飲み込めずについた。

なぜなら白式のセンサー、あらゆるチャンネル、何を開いても彼女の存在を示すシグナルがどこにも見当たらないからだ。

『何でどこにもないんだ！ 一体、どうなってるんだよっ？！』

コア・ネットワークのことは授業で聞いたのを丸暗記しただけなので、理論やらなにやらすうとばして『ISの操縦者はどこにいてもすぐに見付かる』くらいの認識しか持っていない。

けれど、ないのだ。シャルロットの反応がどこを探してもない。確かステルス・モードというのがある、というのは聞いたことがあるが、それだつてシャルロットが自身の意思でそうしない限り発動するものではないはずだ。この状況でシャルロットがステルス・モードを使う理由はまずない。

『シャル、どこだ……』

周辺を映す画像センサーからの映像は、どの角度もほぼ最大望遠を表示している。けれどこれはおろか、一機の飛行機や一隻の船だつてそこには映らない。

『クソッ、どこにいるんだ、シャルッ！ ……白式、なんでお前も反応しない！！』

一 夏は苛立ちの矛先を白式に向ける。それが何の意味もない行為だと頭ではわかっていても、そうでもしないともう感情が暴走してしまつて、あつという間に思考を飲み込んでしまいそつなのだ。

辺りは一面、青一色。

海と空の境目までくっきりと見えるのに、一番大切な人の姿だけが見えない……。

苛立ちと不安が混ざりあつた苦い表情をする一 夏。焦りが彼の判

断力を鈍らせる。

可能性からいえばかなり低い陸の逃走経路を捜すべきか、それとも海上の捜索範囲を広げるべきか？ そのどちらを選択したとしてもリスクはある。広範囲の捜索など、本来たった一人で行うものではないのだ。より遠くまで手を伸ばせば、狭い範囲しか見渡せない。より広くまで手を伸ばせば、自ずと浅くまでしか目は届かない。

捜せる範囲より捜せない範囲のほうが広い捜索なんて、結果は火を見るより明らかだ。だが、他にもっと有効な手段があるわけでもなく、そして何もしないでいたって時間はどんどん過ぎていってしまう。

じつしている間もシャルロットの身は危険に曝されているに違いなかつた……。

『……こっぢか？！ 白式つー！』

自身の勘を頼りに向かう先を定め、スラスターを開く。

例え可能性がわずかであっても、彼女を思う強い気持ちが奇跡を生んでくれるのではないか、と心のどこかで祈つてしまふ彼に罪はない。

が 。 現実はたつたそれすらも許してはくれない。

ピーッ、と警告音が鳴る。センサーの数値がちょうどゼロを示す。緊急時だったから、IISステーションは粒子変換で呼び出していた。バスを抱えて一度、往復した。みんなと合流した場所から一人飛び出し、何度もイグニッショーン・ブーストを使った。当然、エネルギーは消耗しきつていた。

『なつ？！ ま、待ってくれ、白式！ 頼む、まだ行かないでくれー！』

一夏の叫びは、しかし届かない。

あつといつ間に粒子の粉が散ると、白式は待機モードに変わってしまう。

そして支えを失った一夏は、海上30m程から垂直に落下する。

「クツソオツーーー シャルーツーーー！」

最後の叫びを残して、一夏は海面へと墜落する

バヒュンッ！

「…………ッ？！」

背中に衝撃がはしつた。

ただ、それは墜落の衝撃といつには随分と控えめ過ぎた。怪訝に思つた一夏は固く閉じていた瞳を開く。

『フンッ！』

一夏の眼前に、鋭く目を釣り上げたツインテールの少女の顔があつた。

そして気が付いた。一夏の体は甲龍に抱きかかえられるようにして海上を飛行していた。激突直前のあわやのところを、鈴が危機一髪で救つたのだ。

「鈴、お前…………」

一夏が口を開こうとするが、鈴がそれを遮つた。過去最高の勢いで、それを遮つた。

『あんた、バツツツツツツツツツツツツツツカじやないのッ！！ 一体、何やつてんのよ？！』

「なっ！ お、俺はシャルのことを…………」

『…………ちょっと一夏、いい加減にしなさいよ』

再び鈴が一夏の言葉を遮る。

『こんな事して、本当に見つかると思つてんの？！ あんた、もうちょっとしつかりしなさいよね？』

『だけど、…………こうしてると間もシャルは！…』

鈴に喰つてかかるうとする一夏。その姿に、とうとう鈴の我慢が限界を越えた。

まだちよつとだけ残つた理性のおかげで、右腕の装甲が光の粒に変わる。けれど、後ろいっぽいに引いた手はひとかけらの躊躇もなく振り下ろされた。歯を喰いしばった彼女の表情が、最後の瞬間一

夏の田に飛び込んだ。

バツチーン！！

「なつ……」「

頬に鋭い痛みがはしる。一夏は呆然として鈴を見た。

『あなた、あの子のカレシなんでしょ？！なら、わからないっ？こんなときあの子がビービー泣きながら、あなたの助けをじつと待つてるだけだと思つ？ わたしと諦めて覚悟を決めちやつてるとも思う？！』

「あ、いや……。うう」

『…………そんな弱い子じゃないでしょ。きっと必死になつてあたし達に居場所を伝えようと、今も戦つてはすでしょ。それがシャルロットって子、じゃないの？ あんただつて、そんな彼女だから好きになつたんじゃないの？！』

「…………」

一夏はもう一言も言い返せなくなつてしまつた。つまり鈴の言つといひは、全部がその通りだつたからだ。ただただ、自分が情けなく思えてくる。

「鈴……。すまない、俺……」

『あなたが』

そう言つと、鈴は顔を背けてしまつ。そうしてちょっと言ひながらそうに言葉を続ける。

『あなたが…………しつかりしなきや、ダメじゃないのよ…』

「ああ、そうだな」一夏は、ようやく少し冷静さを取り戻し始める。

『昨日やそこいらで恋人同士になつたからつていい気になつてんじやないわよ？！ あたしなんて、もう一年もあの子の親友やつてんだからね。こんなことでのあの子を不幸にしたら、あたしが絶対許さないわよ！…』

一夏は顔を上げる。そして真つ直ぐ鈴の瞳を見据えて、答えた。

「ああ。わかつてる」

『ふんつ！ わかつたんなひつ、…………戻るわよ』

そう言って鈴は速度を上げ始めた。

次第に、視界に小さく青い機体が見えてきた。

ワルキューを怒らせた。

俺は今、この息苦しい雰囲気にじっと耐えていた。誰も、一言も喋らなかつた。

真正面に立つ銀髪の美しい女神は、さつき一言「お前というやつは、本当に……」まで言つてから、肩をわななかすばかりで次を喋つてはくれない。と、いうよりたつた今も口から溢れ出てきそうな怒りの感情を抑えるのに、彼女はすべての言葉を一日封じる必要があつたのかもしれない。多分、口を開けば一言田も一言田も『怒り』なはずだ。

眉に皺をよせて口を真一文字にした抑えきれない憤怒の表情は、こんな時にいうのもなんだがとても整つていて美麗で、「美人つてやつはどんな表情でも様になるから得だよな」と思つ。だけれどこんな時だからこそそれを口にしたら最後、もう立ち上がりにならしくらいに打ちのめされそうなので、今、言つのは止めることにする。

そういうえば我が家にはブリュンヒルデもいた。本人はそう呼ぶと嫌がるが。

彼女もまた一日の大半を怒つているような気がする。戦乙女達はそういう気質なもかもしれない。

……などと、一夏はちょっと浸つてみる。

鈴にひつぱたかれた頬が痛い。

帰つてくるなり、おんなんじとこりを一発ラウラにぶん殴られた。こつちは拳だつたから、痛みの質は『ヒリヒリ』から『ズキズキ』に変わつていた。それつきりラウラは、額に出来た血管マークをピクピクいわせたまましばらく黙りこくつている。

一夏は、自分の考えなしの行動については十分反省していた。だけどそれはおいて、今はすぐにでもシャルロットを探しに行かなければならぬ。それにはみんなの協力も必要だと思うのだが、

「な、なあ、ラウラ。そろそろシャルを探しに、だな……」

「――「フンッ！――」

金と銀とツインテールが、凄い形相で一夏を睨みつけてくる。

「う。……」

彼女達は取り付く島がない。それで一夏は身を小さくするしかなかつた。

誰一人、言葉を口にしない。腕を組み、口を一文字にし、足元を見つめる。

夏の日差しが暑い。

多くの学生達がそれを避けるためにバスの陰で待機していた。怪我人の治療や、各車両の故障のチェックが今もなお行われている。バッテリーの浪費を避けるため、生徒達には今、一時車外待機の指示が千冬から出ていた。

指示を出した後、千冬達教師陣はちょっと離れた一角で何かの打ち合わせを続けている。

その教師達からも、また生徒達が集まっている所からもちょっと離れた場所に、一夏達専用機持ちの輪があつた。日差しを避けるため、樹齢数十年くらいだろう大きな松の木の下に集まっていた。針葉樹の葉の編むメッシュの間をぐぐり抜けてきた光のシャワーが、ときどき田に入つて眩しい。

タタタツ、タツ！ と小気味よく響いていた音が急に止んだ。

それはさつきから一夏の斜め後ろでひつきりなしに続いていた音だ。そして「ふう」つと小さく深呼吸するのが聞こえた。途端に、腕組みして俯いていたラウラ達の顔がガバッと上がつた。

「どうだつ？！」

我先に口を開いたラウラの視線の先に、やや神妙な面持ちがあつ

た。考え込んだ時の癖らしい、あの右の人差し指の腹をあがみする素振り。たっぷり一呼吸分の時間を考えた後、彼女 簪は答えた。

「……多分、間違い……ない。きっと、今は……海の中だと想つ」「やはりッ！ ならば、逃走は潜水艦でか？」

「……おそらくは。ISの可能性は否定できないけれど……80%以上の確率でNOだつた……」

「そうか。……みんな、集まれつ」と、ラウラが全員を呼び寄せる。その声にさつきまで身動き一つなかつた面々があつたという間に距離を詰め、ラウラの周りに円をなした。「えつ？」と困惑の一夏は、出足が遅れたせいでその中に入りそびれてしまつ。そんな一夏を「ぼやつとしない！ わたまと来なさいよッ！」と鈴が腕を引いてせつついた。

ラウラは一夏が輪に加わる時間も惜しい、といつた表情だつた。鋭い目で睨みつける。一夏は何だかよくわからないまま、場の空気にも馴染めずに居心地の悪い気分だ。

「いいか……」

ラウラが話し始めた。

「私の言つことのほとんどは推測だ。だが他に発見の手立てがない以上、これを唯一の事実と考えて私達は行動する。他の一切の可能性は考へない。……いいな」

一同は首を縦に振つた。一夏もちよつと遅れながらもそつする。「……シャルロットは拉致された。犯人は今のところ8名、確認されている。しかし逃走ルートを確保していた人員も考えれば二桁はいるはずだ。そして現在はおそらく……」

そう言つてラウラの投げた視線を受け、簪が空中投影ディスプレーの一枚を輪の中心、全員が見える場所に展開し直した。そこには地図が映つていた。九州、四国辺りを中心とした日本近海の地図だ。そしてその地図には沖縄の更に西の海を中心とした大きな円が書かれている。

そこを

「ラウラが指でぐるりとなぞった。

「……この中のどこかにシャルロットはいる」彼女は静かに言った。
「なつ?」と一夏が息を呑んだ。そして「ほ、本当か?、なら…

…」言いかけた言葉をラウラが遮る。

「一夏、黙れ。今は一秒でも惜しい。黙つて聞けないのなら、席を外せ」

彼女は鋭い声で一言言った。

しかし、そうはいかない。事はシャルロットの問題で、自分は誰よりも必死なのだ。それを「黙れ」などと、たとえラウラだとして許せない! 一夏がカツとなつて睨みつけたラウラの目は、

自分なんかよりももつと真剣だった。いや、一夏が真剣でない訳はないし、『もつと』といふのはちょっと違う。ただ、真剣さの密度が自分なんかの比ではないと、一夏は感じやる負えなかつたのだ。

ラウラの目は、見たこともないくらい深い色をしていた。立ち入ることも、触れることもできないくらいの緊張感が、その目の光から感じられた。

一夏は口を閉じた。それでラウラも彼から視線を外した。

「それにしても、かなりの範囲ですわね……」

セシリアは自身の予想以上だ、と言わんばかりに眉間に皺を寄せて言つ。

「……ゼロに近い情報からの……確率予想だから。これでも本当は狭いくらい……ただ、」

そう言つて簪はラウラを向く。ラウラが小さく頷いて言葉を続ける。

「ああ。それ以上は我々のスペックを使い切つても索敵不可能だ。だからその円の海域にいると信じ、行動するしかない」

「うん、確かにそうよね」

鈴はそう言うと、ふうっと肩の力を抜いた。そして振り返ると、簪を向いてウインクしてみせる。

「あたし、信じるわ。『I-S学園の頭脳』、更科簪の導き出した答えなら……きっと間違いないもの」

その言葉に、思わず簪は頬を赤くする。

いつもだつたら照れ隠しに俯いてしまう彼女は、けれどその時は違っていた。簪の事をジッと見つめ返して、小さく口クリと頷いたのだ。鈴はそれを見て、自分がなんだが嬉しい気持ちになつていてのに気が付いた。口角をいっぱいに上げて、簪に向かつて笑つてみせた。

信じる、といった自分の言葉が本当の意味での確信に変わつていく気がした。

「みんな……」

ラウラが低く響く声で呼ぶ。

彼女の声を聞いた全員が、すつと押し黙つて彼女の顔を見た。全員、すぐにまた緊張の面持ちに変わつていった。それはまさに皆がラウラをリーダーと認め、信頼している表れでもあった。

一人一人の顔をぐるりと見回してから、ラウラはゆっくりと口を開いた。

「……どういう方法かはわからないが、敵はシャルロットのシグナルを消すことに成功している。この意味をもう一度、正しく理解すべきだ。相手は人類初の『人対I-S』の作戦を実行するため、周到な準備をしているのだ。気を抜けば、簡単に逃げられてしまう……」

全員の緊張感が増すのがわかつた。ラウラが『逃げられて』の一言だけあえて声色を下げたのだ。そして全員の頭の中にそのことと同義のもう一つの『現実』が、彼女が言葉にして発しなかつたことで逆に深く刻み込まれる。

「
そうなれば、もうシャルロットは戻らない。多分、一度

「だが、私は自分の力を信じている。無論、学園生活を共にしてきたお前達の力も、だ。だから全員が力を出し切れば必ず作戦は成功すると確信している」

そう言つと、ラウラ・ボーデヴィッシュはほんの少しだけ笑みを見せた。それが見る者の自信と団結につながると知つてているのは、さすがリーダー経験者だった。否応なく、全員の士気は高まつた。

「さあ、いこう」

ラウラの言葉で全員がIFSを展開した。幕が広げた絢爛舞踏・アノリミテッドの大輪が、作戦開始の合図となつた。

気が付いたときには無機質な造りの部屋に押し込められていた。天井は低く、明かりはついているものの檻や牢屋を想像させる異様な圧迫感のある部屋だった。

しばらく周囲の様子を伺つていると、その部屋は何かの乗り物の中なのだと気付く。低く唸るエンジンの音。どのくらいの速度かはわからないが前進しているのを体のどこかが感じている。

空気が悪い。気持ちが悪い。

人いきれが圧縮したような不快な酸素。吸い込むだけで喉にも肺にもねつとりとまとわりつくような異質感を覚える。ここが世界のどこなのはわからない。けれどここが何の中なのは、それでシャルロットにはわかつた気がした。

(潜水艦……?)

こんな事態に陥つても案外と冷静な自分。だが、こういう事態はもうずいぶん前から予想していたのだ。

いや、『覚悟していた』と言つべきなのだが、

モアナーの設計データと引き換えに自由国籍の権利を得た時から。いつかはこういうこともあるだらうことは認識していた。だからその時のために、とモアナーのプロトタイプ一機を取引の対象にも入っていた。何かあっても自分にはISがある。自分を守る術がある、と。

結果がこれだ。抵抗することもできずに拉致された。おまけにどうやらISを起動することはできないらしい。さつきから自分の意思にモアナーが反応しないのだ。待機状態のモアナーはネックレスのまま彼女の首にかかっているから、何らかの方法でISを沈黙させられてしまったのだろう。そしてシャルロット自身も手錠のよう

なもので後ろ手に拘束されていた。よくは見えないが、かなりしっかりした拘束具だ。おそらく解錠は不可能だろう。

それでも、落ち込んではいられない。どうにか脱出する方法はな

いだろうか？

室内を見回してみる。窓はなく、扉が一枚だけ。あとは何もない。本当に何もなかつた。

（女性に対する待遇としては最悪だね。失礼しちゃうよ……）

シャルロットは頬を膨らませた。思つたとおり、残念だが脱出は難しそうだつた。

ふと、頭をよぎる顔があつた。その姿は次第に頭の中で色を帯び、形を成していく。だけど今はダメだ、とシャルロットはそのイメージを頭の中から無理矢理追い出した。多分、今、その顔を思い出してしまつたら心が弱つてしまつ。頼りたくなつてしまつ。すがりたくて、泣きたくもなつてしまつかもしれない。だから、今はダメだ。心を強くする。絶対に脱出すると念じる。

会うために。その顔に、シャルロットにとって一番大切なその人に会うために。

「一夏……」

彼女は敢えてその名を口にした。必ず生きて再会すると、固く誓うためにも。

今回のシャルロット救出において、セシリアが任された役目は他の専用機持ちと比べても何より重要な役目だった。そして、そのことは彼女自身が一番よく自覚していた。

彼女は今、海上十数m上空にじっと佇んでいた。目を閉じ、静かに息を潜めて。

「この作戦においてセシリアの役割は何より重い。つまりは、『お前の失敗は作戦自体の失敗を意味する』ということを理解しろ。…悪いが重責を負ってくれ」

ラウラは作戦の全容を皆に伝えた際、セシリアに向かつてそう告げた。そして申し訳なさそうな顔もした。

初めて見た顔だった。ラウラ・ボーデヴィッヒがあんな顔を見せるなんて思わなかつた。そしてその印象がセシリアの胸深くまで刺さつていつたおかげで、彼女はいつもの高飛車なセリフがでてこなかつた。

「ご期待に添えるよう、精一杯尽くしますわ。必ず、この大役を果たしてみせましてよ」

「頼む……」

彼女を送り出すラウラの顔がずっと田の奥に焼き付いている。あの右目が、あんなにも真剣に自分を見ていたことなど、これまで一度もなかつた。

セシリアが今いるのは、簪が示した探索エリアのほぼ中心。沖縄の更に西の海上。

『さあ、ティアーズ達。わたくしとあなた達がどれだけ有能か示す時ですわ』

そう言つとセシリアは24機すべてのブルー・ティアーズを開放した。その一機一機を我が子のように愛するセシリア。この作戦の成否は彼女に掛かっていて、彼女がその任せられた役割を成功させるためには彼らティアーズ達がどれだけ期待に応えてくれるかに掛かっていた。

これまでに、訓練を含めたとて経験のないアクト。一抹の不安はある。だが

『行きなさい、わたくしのナイト達!』

彼女の呼号を受け、ブルー・ティアーズ全機が散開する。それを

見送る瞳が強い決意を持つて輝く。

必ず、見つけ出すと。

ブルー・ティアーズ達は作戦海域全体に広がっていくと、それぞれがセシリアの指示による所定の位置で海上に着水した。海上にブイのように浮くティアーズ達。そして彼らはBTビームを海中に向け最少のエネルギーで発射する。当然、水の抵抗によりビームはすぐにかき消されてしまうが、その衝撃波は微弱ながらも海中に向けて進行する。その波動の変化を各ティアーズのセンサーから受け取ったセシリアが即座に解析する。

何度も何度もティアーズ達はビームを発射し、そのたびに送られてくる24機分の膨大なデータにセシリアは意識を集中する。彼女が今やうとしているのは、海中を進行しているだらう潜水艦を探し出す事。ブルー・ティアーズを武器としてではなくソナーとして使う初のタクティックスは、成功すればBT兵器の新たな運用方法を模索することになるだらう。

成功すれば。

セシリアはじりじりと顔を覗かせる焦りと不安を必死で押さえつけながら、おびただしい量のデータと戦っていた。

自分が失敗すれば、シャルロットを失う事になるだらうという恐怖とも。

鈴が今居るのは、セシリアが行動する場所からなるか上空だ。彼女に与えられた仕事は、セシリアが見つけ出したターゲットを海上に引っ張り出すこと。ただ、それだけ。

言葉にすれば単純だが、実際の作戦行動は『臨機応変』の一言でしか表せられない。発見場所、水深、速度、その他全く不明なモノを素早い判断でどのようにして捉えるか。それは確かに鳳鈴音にし

かできないことなのかもしない。冷静な判断、柔軟でときに大胆、ときに慎重な彼女だからこそ任せられるのだ。

鈴はチャンネルを開き通信を送る。

『そつちはどう? 準備はOK?』

それに応える簪は、自身の立案した作戦にも関わらずやや困惑気味だった。

『……OK、だと思つ。……大丈夫、やれる……』

スペック上は可能な筈。ただ、過去に前例はない。

更に簪は今、人類史上初のIS水中稼働に挑んでいた。慣れない抵抗と水圧。センサーが幾つか上手く作動しなくなつた。それに自身も未知の空間に戸惑いを隠せないでいる。

確かに宇宙での活動を目的に作られたのがISであり、空気のないところや特殊な環境にも耐える機能を有してはいるはずだ。けれども動かすのは人間であり、17歳の少女である。そこにはまだ未成熟の心しか入つておらず、人が感じる不安や恐怖に対する耐性というものはISのスペックには搭載されていない。

それでも自分の立てた作戦への責任感や、大切な友人を救いたいという思いは少女を強くする。それはISが持つ性能を越えた『人の可能性』もある。

簪は自分自身を信じて勇気を振り絞る。そして打鉄式式は海中をゆつくりと前進し続けた。簪の役目を、鈴と協力して標的を海上に追い出すために、セシリ亞から発見の報告を暗く深い海の底で待ち続けた。

一夏、篠、ラウラの三人が向かう先は、南太平洋・ポリネシア諸島。オーストラリアやニュージーランドの遙か東である。

そして彼らが飛ぶ現在位置はグアム島の北800km辺りの上空。スラスターをほぼ全開にした高速飛行で目的地を目指している。

天候は快晴で雲ひとつない。見渡す限り世界は蒼一色であった。しかしいつもであればそんな美しい景色に目を奪われるはずの一夏であつても、今この瞬間においてはそんな景色も目に入れど心には響かずについた。

「ラウラッ！ 一体どこまで行くつもりだ」

一人行く先を告げられなかつた一夏は、白式をシユバルツア・レゲンに寄せて話しかけた。

「俺達もみんなと協力してシャルを捜すべきなんぢやないか？！」

しかしラウラは視線を正面に向けたまま答える。

「我々のISは捜索に不向きだ。仮に我々が標的を見付けたとして、沈没させることは出来ても捕えることは難しい。大体、お前などぶつた斬るくらいしか思いつくまい？」

「なあ？！ …… ッ～」

何か言い返そうとした一夏だが、結局言葉は出てこなかつた。彼は悔しそうに目を逸らした。

「安心しろ。お前には元々、期待していない」

そう言つたラウラの機体エネルギー残量が、とうとうレッドゾーンに入ったことをセンサーが示した。ほぼ全速力の飛行を続ける三機だ。当然、エネルギーの浪費は激しい。

「篠、頼むつ……」

ラウラがそう叫ぶと、紅椿から金色の光が舞い散る。篠のワンオフ・アビリティー、絢爛舞踏・アンリミテッドの力が再びラウラとシユバルツア・レゲンに前進する糧を与えたのだ。さつきから幾

度となく「ひつじ」、休むことなく飛び続ける二機のEIS。

「しかし、ラウラー、俺にはわからないんだ。何故、俺達はこんなに日本から離れてしまつている？ 本当にシャルは「ひつじ」いるのか？」

「いや、おそらく「ひつじ」ではない。本命は向「ひつじ」にいるはずだ」

「そう言つて目線をセシリ亞達のいる方角に向けるラウラ。」

「なつ？！ じゃあ何で俺達は「ひつじ」に！ 今すぐ戻つて捜索を…」

一夏はシユバルツア・レーゲンの肩に手を掛けてラウラに直談判するのだが、彼女はその手を払い除け、決意を持った目で一夏を見返すのだ。

「一夏。 私の言つことを聞けないのなら、シャルロッテはもう戻らんぞ」

「クッ！ しかし……」

歯を食いしばり一夏は呻いた。大切な者を思う心が真っ直ぐなだけに、すぐに何かとぶつかってしまう。頭では分かっているのだ。おそらくラウラの行動は正しい。ただ納得しようにも確信がなくてそう出来ない。言われるままに行動するしかできない自分が、腹立たしいくらいもどかしい。

そんな煮詰まつた様子の一夏を見て、ラウラは嘆息した。少しは成長したかと思っていたが、相変わらず思いばかりが空回りするこの男。納得させるには、やはり自分がリスクを負うしかないのか…。

ラウラは一息吐くと、やがて決意の表情になつて呟いた。

「一夏。……これから私が喋ることをお前の胸にだけ残せ。データには残すな。音声センサーも切れ

「えつ？」

「いいから。早くしろ」ラウラに急かされて一夏は、慌てて白式の音声に関するすべてのセンサーをカットした。途端に、耳に届くのは風を切る轟音とスラスターからの爆音だけになつた。

「うわっ」

まずその音に驚いた。けれど次の驚きはその何倍もだった。ラウラが急に一夏の首に腕をまわし、抱きついてきたのだ！

彼女の顔が自分の顔のもうすぐ近くまで接近してくるのと、一夏はびっくりして大声を上げた。

「バッ、ラウラ、お前っ！ まさか、こんなときにキスッ？…」

そう叫んだ一夏に、

『「ゴンシッ！」』

ラウラは舌打ちと共に右のゲンコツをくれてやった。

「バカはお前だ。私はそんなに安い女ではない！」

フンシッと鼻を大きく鳴らしながら、ラウラは再び一夏の首に腕をまわしてくる。しかし今度の彼女はさつきと違った。力一杯に腕を締め上げるものだから、堪らず一夏は「ぐえっ」と苦しそうな声を上げた。その耳元まで唇を近づけたラウラが、ほんの小さな声でぼそっと一夏に呟いた。

「報いだ。馬鹿者……ツ…！」

ギリギリギリギリーッ、とすじい音で白式の装甲が悲鳴を上げた。もちろん、操縦者の方はもつと大きな悲鳴を上げた。

じばらぐお仕置きとおぼしきフルパワーが続き、よつやくそれから開放されてもラウラは一夏から離れなかつた。

「ラウラ、もういい加減に…」

げんなりとした一夏がラウラを振りほどこうとするが、逆にラウラは腕に力を込めて、そして一夏の耳に向かって話しかけた。

「いいから聞け。こうでもせんとこの轟音の中、話せんだろう？』

「あ。なるほど……でも、それならセンサーを

「一夏、黙つて聞け。これが私の口から出た言葉だと、データに痕跡が残つただけで国際問題なのだ。だからわざわざこうしている。いいか、黙つてよく聞け」

「あっ、ああ」

突然『国際問題』なんて物騒な言葉がてきたものだから、一夏も急に身を引き締めた。そしてラウラの次の言葉を待つた。

「一夏、おそらく今回のシャルロット拉致は

「『クツ

フランスが当事者だろ」

「なつ、ナニ？！」

「まず、間違いはない。私は確信している」

ラウラの言葉に一夏は耳を疑つた。そんなはずは、と同様を隠せないでいると、ラウラが続けて彼女の見解の理由を話し始めた。

「あの国はシャルロットの能力を熟知している。IISパイロットとしての適正、技能。彼女個人の戦闘能力。そして

ラウラの右目が一夏の目を覗き込む。

「知つているか、一夏。歐州連合の次期主力機にラファール・モアノーが選ばれたのだ」

「えつ？！ほ、本当かッ！すごいじゃないか、それってシャルの……はつ」

「そう、つまりはそういうことだ」

ラウラはそれまでじっと見つめていた一夏の目から視線を逸らせた。視線はじつと海面へ注がれる。この世界のどこか。この海と続く暗い深海にいるはずの彼女の顔を思い浮かべる。そして「シャルロットの能力は高すぎたのだ。パイロットとしてだけではなく、開発者としても。自由国籍の彼女は、今や引く手数多の立場。このIIS世界のなかだけで言えば、篠ノ之束と同じレベルのSS級超重要人物なのだ」

「なつ……」

そこまで聞いて一夏は朧げながら口の輪郭が見えたような気がした。

自國から離れた人物。シャルロット自身の希望でそうなった以上、再び戻る可能性は低いだろう。その能力を知っているならば、それが他国に渡ればどれだけの脅威になるかも熟知しているはずだ。ならば無理矢理取り込むか、それができなければ。

「シャルの命がッ！ そんな……そんな事、絶対に許せない……」

「一夏。これは國家の威信や、もつと大きく言つてしまえば自國の安全のためとも言える。私も軍属だ。お前のように真つ直ぐに否定は出来ない。……だが、本当はお前にも原因の一端があるのだぞ？」

ラウラが一夏の胸を指で小突いて言つ。一夏はその一言がつまく飲み込めない。

「俺に、原因が？ ……何故だ！？」

ラウラに詰め寄る、一夏。しかし、ラウラにしてみれば気抜けさせられた気分である。

「ふう、この男はそういうところが抜けているというか。まあ、そういう人間だから、シャルロットもまんまと当てられたのだろうが……」

冷笑し、聞こえないくらいで眩いたラウラに対し、一夏は苛立ちを隠せず捲し立てた。

「ラウラ、はつきり言えッ！ 一体、俺の何がシャルを危険に晒したと？」

詰め寄る一夏の顔を無造作に押し返した。そして呆れたような口調でラウラは答えた。

「馬鹿者。お前があいつの自由を望んだから、あいつは必死になつてお前のためにそれを勝ち取つたのだろう？ それで自分が負うリスクを、自分がだけが背負つ覚悟までして、だ」

「えつ？！」

「考へてもみる。学業の片手間に第三世代兵器を設計してしまうような女だぞ。自分がテュノア家を出るために『何をどれだけ』代償

として払わなければならぬかくらい、わかっていて当然だろ？
それをあいは、ヒトの嫁にうつつを抜かして、のぼせ上がりで、
その上……あらう」とか自身を見失ったのだ！ 全くもって、世話
の焼ける愛人だ！－

「は、はあ～？」

そう言つたラウラは急にバンツ、と両手で一夏を突き飛ばした。
漆黒の機体は白銀のそれから距離を取る。そしてシユバルツア・
レーゲン側から強制的に白式の音声センサーが継れた。ラウラの声
がいつものように回線を通して聞こえてくるようになる。

「いいか、一夏！ シャルロットは私の一番の友人であり、そして
私にとっては唯一の家族だとも思つてゐる。必ず、助ける……。そ
のために我々はここでやらなければならぬことがあるツ－－」

『ビーッ！』と、突如センサーにヒマージョンシーのシグナルが
点滅する。

ハイパーセンサーが示すのは数百km離れた場所からこちらに向
かつてくる影。最大望遠の映像に映るのはネイビーグリーンのシル
エットだ。

正面の空域から迫るシグナルは最初一つだった。しかしその瞬間、
それは八つに増えた。そして素早く散開する。

「知つてゐるか？ 『フランス領ボリネシア諸島・タヒチ』。……
おそらくあそこが奴らの『ゴール』だ。そして我々の救出作戦を阻むの
が、次期歐州連合主力IS『ラファール・モアノー』。リヴァイブ
を半分以下の換装と調整で第三世代型に『ヴァージョン・アップ』
してしまつあの機体は、汎用性と量産性に優れた現在最強の兵器だ
！－－

「クッ！」

一夏は歯を食いしばつた。まさかこんな形で、最愛の人の努力の
結果と向き合つとはつ－－

ラウラの怒号のような声が耳に響く。

「絶対にセシリア達の元には行かせるなッ！ 必ずここで食い止め
るぞー！」

ショバルツア・レーゲンのレールカノンがセーフティを解除した。
ラウラは左目の眼帯を早くも外し、全力でこの戦いに挑む決意を現わにする。

「行くぞ、一人ともー！」

「うおおおおーー！」

一夏は雪片式型を構え、スラスターを全開にして飛び出す。自身の戦いの意味を理解した今、彼は最愛の人から遠く離れたこの場所で、彼女を救うべく戦うことになる。

「ちょっと……。何してのよ、あんた達……」

鈴がさつきまで組んでいた腕を解いて呆然とした声で言った。

今、遠い空で起こっているそのことは、彼女にはあくまでコア・ネットワーク上のシグナルでしか認識できない。

けれど、3対8。

IS同士が飛び交う様子はセンサー上で見れば『点と点』が重なり合っただけだ。そして、ふとシグナルが一つ消えた。3対7

「あんた達、何してんのよ！ そ、それじゃ戦争でしょ？！ ねえ、一夏あ！！」

鈴が爆発する感情を抑えきれずに甲龍のスラスターを開こうとした。しかし

「ダメよ！……鈴、行っちゃダメ」

強引に視界に割り込むように、センサーの正面に簪の厳しい表情が映った。

「簪つ！ なんで？ だつて、こんなのおかしいじやない？！ 訓練じやないのよ、それにゴーレムみたいな無人機でもない。人と人が戦つて……こんなんじや、ただの戦争だわ……！」

鈴はセンサーのビューポートに映る簪に噛み付くみたいにして精一杯訴えかける。けれど簪の表情はまったく変わらない。「あんた、何とも思わないの？」鈴のその言葉にさえ、彼女は表情を曇らせない。

「鈴、わかつて……。ラウラ達は今、私達がシャルロットを発見するための時間稼ぎを……してくれている。でも……三人は今、フランスの正規軍と戦っているの。それに領空侵犯の可能性もある。私達が行つても行かなくても、……ラウラ達の扱いはテロリスト……」

「なつ？！ じゃあ、どうすればいいの？ このままじや二人とも

……

鈴は顔面蒼白になつて唇をわななかせた。

ISHは絶対防御があるから、操縦者が死亡するのではないはずだ。だけど、もし捕まれば一夏達はテロリスト扱い。どのように裁かるのかはわからないが、最悪の場合

「簪、あたし無理よッ！ 行かせて、お願ひー！」

鈴は懇願した。目に何か滲んでいた。『誰かより誰か』なんて選ぶのが良くないのはわかる。けど他の誰かを助けるために、一夏が

「嫌だッ！ あたしは一夏がそんなふうになるのを黙つてみてられないー！」

「……鈴つ！」

甲龍の脚部スラスターが全開で開かれる。急激に温度が上がったために、燃えるように真っ赤になつている。鈴はキッと空を見た。そして、今、まさに飛び立とうとするつ！

その田の前に、青碧色の影が飛び込む。

『ヒュンッー！』

「なつ……」鈴はその鼻先に突きつけられたブルー・ティアーズの発射口に睨まれ、二の足を踏むことになる。

そして聞き覚えのある軽やかな声が、この緊迫した状況の中でもいつもと変わらない調子で言うのだ。

「ちょっと、いい加減にしてくださいまし？ お一人が騒がれると、わたくし集中できませんわ」

「セシリ亞！ ……あんたッ」

鈴が自分のほぼ真下で、今も海中搜索を続ける蒼い機体を鋭い目で睨み付けた。

「今、あたしに刃向かうんなら本氣でぶつ殺すわよー！」

思考を感情が追い詰めてしまつ切迫した状態だった。冷静な判断

なんて、まるで出来ない。だからきっと無意識での反応だったのかもしれない。

鈴の行き過ぎた反応。龍砲がその蒼いTISをロック・オンしてしまったのだ。

セシリ亞はセンサー越しに鋭い視線を返した。鈴は、それで今にも龍砲を発射しようとしていた……。

「……わたくしを撃つて、一夏さんのところへ行つて、それで解決するをお思いでして？ もしそうなら、そのおめでたい脳みそに免じてここは見逃して差し上げてもよくなつてよ？」

「セ、セシリ亞ああ！…」鈴の唸るよくな声が響く。

「……でも。わたくしはそつは思つておりませんわ」「な、なんですつてえ？！」

セシリ亞が視線を鈴からそらし、コバルト・ブルーの海に下ろす。「わたくしだつて、一夏さんを助けたい！ わたくしだつて……直ぐ様飛んでいつて、一夏さんをお守りしたいですわ。でも、それは彼は救えない。あのお方を真にお守りするには、この戦いを『先に』仕掛けてきたのが一体どちらなのか証明する必要があるのですわ」

「えつ……」

「もしもこの争いが先にあちらから仕掛けてきたものだと証明できれば、あちらのとつた戦闘行為が実は隠蔽工作のための物だと証明できるはずですわ」

「あ、ああつ……」

鈴がセシリ亞の考えを理解して、そして言葉を失つた。

シャルロットを救い出す。そうすれば結果的に一夏の無実を晴らすことも出来るはずだ。国が正規軍を動かして戦闘まで行なつたのが、実は一人の少女の拉致作戦の支援だった、なんて諸外国に知られるわけにはいかないはずなのだ。

三人が無言になつて、それぞれが自分の心を沈めるみたいに俯いた。そうすると耳には静かな小波の音が届くのだ。ザザアー、ザザ

アーッと穏やかに胸のうちを洗ってくれる。その海の青が、熱くなつた頭をすつと冷ましてくれる。

「わたくし、まだ一夏さんのこと……諦めきれませんわ」

急にセシリアが呟いた。

「だつてあんなに素敵な男性、他にいないですわ。あんなに信頼のできる人、他にいないですもの」

ちょっとだけ微笑んだセシリアの顔は、気丈にみせるつもりの彼女の意図とはちょっと違つて寂しそうだつた。けれど呟いた一言は、この場にそぐわない内容なのに三人の心を一つにしてしまう魔法の言葉だつた。

「わたくし、このような作戦の中核を担う大役を任せてくださつた信頼に応えたいのですわ。一夏さんのために……。だから今、わたくしは自分が求められていることを全うしてみせますわ！」

「うん……」「めん、セシリア」

鈴がセンサー越しに頭を下げた。

「あたしも出来る事、何でも手伝つわ。遠慮なく言つてね」

セシリアの顔に、今度はまっすぐな微笑みが映る。簪も、鈴も、三人がセンサーを通じて笑顔で頷きあつた。

「……でしたら、鈴さん。まずはこのロックを解いて欲しいのですけれど……。さつきからアラートがうるさくて堪りませんわ」

「あ、ああっ！」「ごめん！」

簪がそんな二人の滑稽なやりとりに、くすくすと吹き出していた。そうしていつの間にかその空氣は三人全員に伝染して、最後はみんなが笑い出していた。

「ふふふ……」

「ちょっと、ヤダつ。そんなに笑わないでよ？」

「クスクス……」

眼下にはどこまでも広がる海。けれど、必ず見つけ出す。彼女達はあらためて気持ちをひとつにした。

荒っぽく部屋から引っ張り出され連れていかれた場所は、『やはり』と自分の考えを肯定する潜水艦の操舵室だつた。細くて奥行きがあり、天井の低い迫つ苦しい空間に、何人もの男が仏頂面で座つていた。

シャルロットは素早く目を走らせ、出来るだけ多くの情報を手に入れようとした。

しかしそれを察したのかどうか、浅黒い肌色の男が彼女の前にすつと立ちはだかった。そのせいでシャルロットからはほとんどの計器類が目に入らなくなってしまったのだった。彼女は内心、舌を打つた。

男は170cm台の後半くらいの身長。体つきは屈強、というほどでもないがよく鍛錬されているのはわかる引き締まった身体だ。髪をかなり短く刈込み、同じくらいの長さのあごひげを蓄えていた。年齢は30代後半くらいだろうか？ 背負っている風格のようなものでわかつた。この男がリーダーだ、と。

「……僕を一体、どうするつもりなの？ どこへ連れていいくの？」
シャルロットが訊ねる。その言葉はバスジャックの時に彼らが使つていた言語でも、19世紀に入つてからは世界基準になつた共通語の日本語でもなく、彼女の『元』母国語だつた。確信をもつて、彼女はその言語を使って訊ねた。ほんの一瞬、男は驚いた様子だつたが、すぐに彼もその言語で答えてきた。

流れのよくな抑揚。空気の抜けるよつな言い切り、語尾。彼は、そちらこそがネイティブであることをすぐに理解させるに易しく、言葉を並べる。

「驚いたな。よく私がフランスの人間だとわかつたじゃないか。一体、何故？」

男の言葉にシャルロットは苦笑する。

「僕達フランス人の使う英語には特徴があるからね。低俗なものを
沢々使うような、そんな響きになる。……訓練が足りないんじゃな
いかな？」

「ほう。それは、いい勉強をさせてもらつたなッ！」
「グウう！」

男は言葉を言い切らないうちに、シャルロットの腹を蹴り上げた
！ 後ろ手に拘束された彼女は、抵抗も身をかばうことも叶わずに、
まともにその制裁を受けてしまう。そして痛みに仰け反り、冷たい
床に顔を擦りつけて嗚咽を漏らした。

「……我々は、貴様の殺害も認める命令を受けている。口では氣を
付けたほうがいいぞ？」

男は低く呟いた。

「時代のヒロイン。強く、気高く、美しい英雄。まるで天上人のような扱いを受ける貴様らエス乗りも、こうなつてしまえばただの小娘か」

男は床に這い蹲るシャルロットを見下すと、吐き捨てるよつこ言つた。

「所詮はただの女。戦つことは出来ても、戦つ意味を理解することなどできんどうな……」

「何を……一体、僕に何をしたんだ？！モアノーをビリヤッた！」

「フンッ！」

痛みに耐え、何とか顔を上げたシャルロットは、気丈にも男を睨まえた。

しかし男はそんな彼女の視線を鼻で笑うと、抵抗できないでいるシャルロットの髪をむんずと掴み、そして近くの壁に叩きつけた！「ギャ、ンッ！！」

短い悲鳴。少女の体は、軍人であるつ男の鍛えられた腕に荒々しく扱われると、まるで小動物のように振り回され、投げつけられてしまう。そして、体はくたりと床に倒れ込む。

「う、うう……」

硬い金属の壁。身をひねることもできず、激しく打ち付けた額からは血を流し、シャルロットは弱々しく呻き声を上げる。

「絶対防御が効かなければ、その身のなんと脆いことか。精神も肉体も、戦場に出るための下地すら出来ていらない小娘がおかしな自信やプライドを持つ……。全く、不愉快な時代になつたものだな」

男は硬い靴音を響かせながら、シャルロットに歩み寄る。

そして、彼女の顎に手をかけるとグイッと自分のほうを向かせた。

「ア、ううっ！……」

手荒な扱いに、再び鈍い叫びを上げてしまつシャルロット。しかし、男にしたらそんな彼女の様子もまた不快なものに映つてゐるかのようであつた。

「情けないな、IS乗り。一国を代表するエース・パイロットも形無しだ……。まあ、フランスの恥を晒す前に貴様が我が国を去つてくれたことは、感謝すべきかもしないがな」

男は冷たい目で見下ろしたまま、シャルロットに向けて嘲笑する。必死で片目を開けるシャルロットにはその表情が見えていた。はなかつたが、男の発する不快な空氣は体中で感じていた。

明らかな、敵意も。

急に、男は彼女の顔にかけていた手を放した。そのせいで支えを失つたシャルロットの身は、また無情にも床に叩きつけられてしまう。「ぐつ！」と嗚咽を漏らす。けれど、いい加減シャルロットのほうもこの扱いに慣れ始めてきていた。受け身くらいは取れるようになつていていたので、さすがにまともに顔を打ちつけたりはしない。だが、男の陰険な性質も理解し始めていた。無抵抗を装つほうが今はいい。そう考えたシャルロットは痛みに耐えるようになづくまつたふりをした。弱々しく、肩を震わせた。

男は、そんなシャルロットの真意まではさすがに気付かなかつたようだ。弄び、力なく床に這い蹲らせた少女の様子に悦に入つてゐるようだつた。そしてそれ以上はシャルロットに手を出そうとはしなかつた。

「モアーノーさえ、……あれば……」

シャルロットはぼそつと、悔しそうに言つた。無念の一言が、情けなく床にバラバラと散らばるようになつた。

男は、肩を揺らして笑つた。

「情けないな。ISがなければ何もできないと、言つてゐるようなものじやないか」

「くつ、そんなんじや……ない！」

「フンッ、どうだかな。……IS乗りといつやつは、皆、まるで自

分が優れた人間のような顔をしている。たもエリートかのような立ち居振る舞いをする。……くだらない！ 優れた兵器を「えられるチャンスがあつただけだ。自身が女に生まれたというだけだ。それなのに、誰よりも戦果を挙げたかのような顔で軍にのさばる、馬鹿げた存在だ。」いざ頼るモノがなくなれば、地べたに這いつくばつて「本当の自分はこんなものじゃない」などといい晒す、クズもだ！！

「ふ、ざけるな！ 僕は元・国家代表の……」

「ISがあれば、だらうー なければそりやつて地面に転がるだけのクソ虫だ。どうだ、悔しいか？ー」

「ぐ、うう。くつそおお……」

シャルロットは口惜しそうに言葉を吐いた。力なく頃垂れた。

彼女のその様子は、男にとつて自分の望む最高の反応だったのだろう。下卑た笑いを響かせると、満足そうな顔をした。

「くくく。悔しそうだな…… なあ、何故、ISは動かないのだろうな？ 偉大な設計者さん、貴様なら当然わかつているんだろう？」うすら笑いを浮かべながら、カツカツと足音を鳴らし近づいてくる。シャルロットのすぐ横まで来ると、屈み込み、そして彼女の顔を覗き込んだ。

シャルロットの目はその男の言葉に狼狽した。ますます男は満足そうな笑みをみせて、そして彼女に向かつて教え諭すような仕草を取る。鼻先に指を突きつける。

「教えてやるよ、バカな設計者さん。貴様のISにはもともと時限式に発動するウイルスが仕掛けられていたのさ。フランスから貴様に渡される前に、製造段階に組み込まれたコンピューター・ウイルス。それは今日、この日の数時間だけしか効果は維持できないが、貴様のISの機能を完全に停止させるすぐれモノだ。普段、守りの硬いIS学園内にいる貴様には手出ししづらくとも、こうして校外に出てしまえばいくらでも手はある。」これは予め学園の臨海学校を狙つて計画されていた襲撃なのだ！

「.....」

その時、シャルロットは一つ目のカードを手に入れた。
男は彼女にはめられたのだ。シャルロットは自身のISが何故起
動しないのか、その理由を見事に聞き出したのだった。

シャルロットの次の攻撃は、沈黙……。

もつ、どうにもならないのだ、と現実を受け入れたような表情。自身を哀れむような遠い目。今的心情を吐露しても止まつたままの思考が言葉を紡ぐことはなく、まったく開こうとしない唇。肩を落とし、うなだれて、もはや抵抗の意思はない。シャルロットは自身をそう偽装するのだ。男の希望通りに、IISがなければ何もできない無力な少女を一人、創つてやる。

男を油断させるために。この沈黙は剣だ。

先ほど聞きました情報だけで、シャルロットはすでに男から一シアチブを奪い取つていた。

何故なら、シャルロットとモアナーを蝕むウイルスには効果に限りがあるからだ。しかもそれは感染させた彼らにしてもどれだけ維持できるかわからぬ不完全な物のようだ。ならばたとえ男が平静を装つていたとしても、時間経過と共にリスクを負うのは彼らの側だ。そのプレッシャーは時を追うことに増していく。

それに『殺害も許可されている』と言つた男の言葉が真実だったとしても、今のこの現状がそれを『最悪の場合のやむを得ない選択』であることを証明していた。

それを第一の選択肢にできるのであれば、彼らはなにもこんな仰々しい鉄の塊を持ち出す必要はないのだ。彼女がウイルスの力でIISを起動できなくなり、絶対防御を失つた時点で早々に殺害してしまえばいいはずである。

だが、それをできない理由

おそらく、フランスはシャルロットの頭脳や技術をどうしても我が物にしておきたいのだ。その能力の全貌を知つてはいるが上の、渴

望。なんとかして彼女を自分達の手元に置いておきたいのだろう。しかしその執心がこの作戦を彼らにとつて絶対不利にさせている。シャルロットは少しでも時間を稼げばそれだけ自分が有利になるのだと理解した。

ならば焦ることはないのだ。この作戦はすでに失敗している。彼らは敵の実力を見誤っているのだ。あの六人の実力を。

僚機の輸送を目的とした一機は予想通りエネルギーをかなり消費していたため、一夏達はまずその一機を集中的に攻撃することで撃墜に成功していた。

しかし、問題はこれからだ。

最初の一機を失うことはおそらく敵も想定内のはずだ。何故なら、先ほどの一機と残りの七機は明らかに動きが違っていたからだ。残った七機のISは非常によく訓練されていて、連携のとれた巧みな動きで的確に一夏達のエネルギーを削りにかかる。必然的に防戦気味の戦いを強いられることになる一夏達。

「チッ、動きが……速い！」

「慌てるな。一機ずつ片付けるまでだ」

ラウラは言った。しかし彼女にしたつて余裕があるわけではない。それは当然だつた。たつた一機で小国規模の軍事力なら圧倒するといわれるIS。それが戦力差は倍以上あるわけだ。おまけに向こうは訓練された正規兵、こちらは専用機持ちとはいえ國家代表の候補生。圧倒的に相手方有利に違ひなかつた。

だが、諦める気など毛頭ない。ラウラはシユバルツェ・カツツ（小型誘導ミサイル）を牽制に使うと、AICで一機の自由を奪い、レールカノンを掃射した。

防御の出来ない状態での直撃。がつさりと削るシールドエネルギー

一。だが、攻撃の狙いはそこではない。

「一夏！」

「つおおおー、零落白夜あ……」

イグニシジョン・ブーストで懐深くまで飛び込むと、躊躇なく一閃する。まるで断末魔のような鋭い悲鳴を上げ、海へと墜落する量産型モアノー。これで3対6。

「よしへー」

一夏が握りこぶしを作った。

「馬鹿者、気を緩めるな！」

刹那、ラウラの声がセンサーを通して響き渡った。

そして、ロック・オンされたことを示すアラートも。

「しまつ、うわあーー」

次の瞬間、視界に一夏を狙う四発のミサイルが飛び込んできた。回避運動は、間に合ひかッ？！

「ちひ」

しかし、ラウラによつてそこにシユバルツェ・カツツの弾幕が張られる！ 雨のように散らした小型ミサイル群の中を、相手の四発のミサイルは通過できずに撃破される。事なきを得た一夏は胸をなで下ろすが、それすらラウラに見つかって激しく叱責されてしまう。「お前は馬鹿か！ 私達は今、自分達の倍の数の敵を相手にしているんだぞ」

「わ、わかつて……」

「わかつていい！－－ いいか、お前が相手を攻撃すれば、必ず別の誰かがそこを狙っているんだ。攻撃の後にできるスキには必ずと言つていいほど反撃が来ると思え。常に守りを意識して戦え。わかつたか？」

「う。……ああ、わ、わかつたよ……」

一夏は雪片式型を構え直すと、周囲を見回し警戒する。

頭上に一つの機影が走った。見上げると一夏達に襲いかかる一機

のラファール・モアノーが、一機はショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を、もう一機はGAU-17/A『ミニ・ガン』を構え、二人に狙いを定めている。

「一夏、飛び込め！ ショットガンの射程にだけ気をつければいい」「了解！」

一夏は雪羅をカノンモードに切り替え牽制に使うと、一機を散開させた。そして素早くショットガンのほうのモアノーとの距離を詰める。細かい動きではショットガンの散弾を避け切ることはできなないので、左右に鋭いフェイントを入れてから一気に距離を縮めた。モアノーはその動きを予想していたかのように、取り付いてくる白式目がけ、素早い銃のグリップヘッドでの打撃を見舞おうとする。

一夏の鼻つ面向け銃底を振り下ろした。一夏は相手の予想外の流れるような攻撃を回避することができず、そのままの速度で正面から突っ込んでしまう。派手な威力こそないものの、一夏の出鼻をくじくには十分の先制攻撃が、彼の眉間に見舞われる。

が、モアノーにその一撃の手応えは残らない。

眉間の辺りを狙つた打撃は確かにそこに届いたはずなのに、まるで実態がないかのように銃底は一夏の顔を突き抜けてしまったのだ。

「…………ツ？！」

突如、目前の一夏の残像を突き抜けて、後ろから人影が飛び出す！ それはなぜか織斑一夏の姿をしていた。彼のシルエットを突き破り、彼の実態が迫るような錯覚。

「イグニッショングースト・セカンド・フラッシュ』！』

一夏の必殺のコンビネーションが、この実戦でも見事に成功した。雪羅のクロー モードがモアノーの腹部をぐさりと貫く。そして相手のシールドエネルギーを奪う。

激痛に顔を歪めるパイロット。だがそこは訓練されたプロの軍人、装備を近接ブレード『ブレッド・ライサー』に切り替え、激しい痛みに歯を食いしばりながらも一夏を反撃した。顔を突き合わせるくらいの近接戦だ。チャンスはピンチ、振りかざされる刃の全てを

かわすことはできず、一夏もダメージを食らってしまう。たまらず一夏は相手の体に組み付いて自由を奪おうとした。しかしボクシングのクリンチよろしいこの行動は、ルールのない戦場では意味を持たないので。モアナーは持っていたブレードを逆手に持ち替え、必殺の一撃を素早く一夏へ振り下ろす！

「……残念。俺はお前の動きを封じる、ただの『おとり』なんだよ」

一夏の笑みが見えたかどうか。

モアノーパイロットのこめかみに直撃したシユヴァルツェア・レーゲンの徹甲弾が、シールドエネルギーの全てを奪い取り、そしてパイロットの意識も奪い取った。

これで3対5。

田をやると銃撃の主は、巧みなワイヤーブレードとショバルツュ・カツツの複合攻撃を牽制に相手を寄せ付けず、また三枚のベルク（ガルウイング・シールド）と王の盾を展開して相手の激しい銃撃をいとも簡単に防いでいた。

思わず一夏は唸る。

『相手を攻撃すれば、必ず別の誰かがそこを狙っているんだ。攻撃の後にできるスキには必ずと言つていいほど反撃が来ると思え。常に守りを意識して戦え』

つまりは今、頭上で行われていることをやれ、といつとなのだろうか？

片手間にしては鉄壁の防御。片手間にしては針の穴も通すピンポイント攻撃。高レベルもここまでいくと、もはや神業のように感じる。しかし銀髪の美少女は、それをさも当然の事のように表情一つ変えずにやつてのけてしまう。一夏は畏敬の念をもつてそんな彼女を見上げた。

ふと、気付いた。その視線の もつともつと先に、閃光が爆ぜるのが見えたのだ。

「なんだ？！」

一夏がハイパーセンサーのヴューを拡大させて閃光の見えた場所を探る。すると

「ほ、笄ツ？！ ラウラ、……紅椿が！？」

慌てて一夏が叫ぶ。ラウラが気付き、視線を送る。その先

「なつ？！ まずい、一夏ツ！ 急げ、笄を！…」

「ああつ！…」

一人の緊張が一気に高まる。声を荒らげる。一夏が白式に呼びかけると、スラスター翼が最大出力で稼働するために大きく展開した。視線の先の上空を目指す。

そこには なんと4対1。壮絶な絵面が展開されている。
このままでは……筹が、危ない！！

一夏と白式がまさに飛び出そうとする間際、ラウラと遭りあつて
いたモアノーが急に左手に何かを粒子変換させた。そしてそこから
握り拳くらいの塊が、一夏に向けて発射される。

頭上から降つてくる塊。大した速度でもなく、決して反応できな
いようなものではない。一夏はそれを軽く薙ぎ払つて飛翔しようと
した。が、

「一夏、ダメだ！ そいつに触るんじゃない！！」

ラウラの声が轟く。しかしその声は一瞬遅く、すでに一夏の右腕
は振りかざされていた。

刹那、爆発

「ガア、ぐああ――！」

一夏が叩き切つてしまつたのは、グレネード弾。それが彼のほぼ
真正面で爆散した。爆発の衝撃を近距離で受けた一夏はかなりのダメ
ージを負い、吹き飛ばされる。

「一夏あ――！」

ラウラの声が悲鳴のように響く。「大丈夫かッ？！ 返事をしろ
！」彼女の必死の呼び掛けに答えたくても、一夏は爆発の衝撃で頭
が朦朧としてしまつてうまくいかない。ようやく彼が返事をしたの
は、爆炎が收まつてラウラ自身が肉眼で白式の無事を確認できたの
とほぼ同時くらいだつた。

「くそ、やられた。大丈夫……じゃないな、これは」
機体の損傷はともかく、シールドエネルギーはかなり消耗してしまつた。それはつまり、一夏にとつて攻撃力の大幅ダウンを意味す

る。零落白夜は使えて、あと一、二回が限度だ。

「どうやら私達はまんまとはめられたようだな。こいつら、最初から幕を狙つて……」

ラウラは苦々しい声を搾り出した。一度、モアナーと距離を取り、一夏の体勢を立て直させるために手を貸す。

「一夏。私が奴を引きつけている間に、幕の援護に行け。あいつのところに行けば、今、失ったエネルギーは絢爛舞踏でなんとかなる」「ああ、わかった。……でも、ラウラは一人で大丈夫か？」

「お前は私を誰だと思っている？」

「……そうだな」

一夏は素直にラウラの言葉に従つことにする。

一人が耳打ちでの作戦会議をしている間に、頭上のモアナーも行動を起こしていた。手に持つていたミニ・ガンとグレネード・ランチャーを放り投げると、新しい装備を粒子変換し始めたのだ。それは手元に銃器を呼び出す際に比べるとかなり大きな粒子の量だった。あつという間に光は上半身全体をぼぼ覆つた。そして数瞬の後、実体化すると左右の手に一対ずつのハンドアックスと、背中に十数基の小型噴射口を持つた増設のスラスター・パックへと姿を変えたのだ。それはラウラにしても初めて見る、特殊な装備だった。

「な、なんだ？！」

「あれは…… そうか、オートクチュール！ むうう、コイツは隊長機かツ……！」

ラウラは叫ぶと、次の瞬間にはもう両腕のプラズマ手刀を展開し、駆けていた。モアナーに真正面から激突し、何度も切りむすぶと、今度は鍔迫り合いで相手と睨みあつた。

「一夏、さつさと行…… ッ、なつ、グア……！」

先制攻撃で相手の出鼻を抑えるつもりだった。しかしラウラの目論見はあつさりと退けられてしまう。

激しい音と共に、シュヴァルツェア・レーベンの左肩が爆炎を上げた。ガルウイング・シールドが切り落とされた。ラウラの表情が

驚きと苦痛に歪む。そして出来た一瞬のスキにモアナーの素早い攻撃が続く。ラウラは相手の一の太刀を防御するのもままならず、両腕で顔を覆うのが精一杯だ。

「ラウラーッ！」

ガキイツと音がして、振り下ろされる攻撃を受け止めるのは一夏だった。間一髪、モアナーとシュヴァルツェア・レーゲンとの間に白式が割つて入つたのだ。

「大丈夫か、ラウラつ」

「……ああ、問題ない。それよりも、一夏、気を抜くな」「わかつていい！」

ラウラと言葉を交わしている間もモアナーの巧みな攻撃をさばきつつ、一夏はなんとか笄のところへ向かうスキを探し出そうとしていた。しかし、モアナーの剣撃は止むどころか激しくなるばかり。次第に一夏は押し込まれてしまつ。

「ぐつ、ガアツツ！！」

一本の斧の攻撃は絶え間ない。しかしそれだけが一夏を苦しめているわけではなかつた。

動きが、敏捷で柔韌なのだ。

これまでどんな訓練、どんな相手と戦つた時とも違う動き。速く、鋭く、そしてしなやか。巨大な斧を振り回しているとは思えないくらいに、その動きはなめらかに一夏を襲うのだ。もしもエラの動きを『直線』に例えるとしたら、このモアナーの動きはまるで『曲線』のようだつた。それが一夏を苦しめる。軌道が、全く読めない。

「くそつ、受け……切れない！！」

「一夏あ——！」

一夏一人では手に負えないと見るや、素早くラウラは加勢に加わつた。プラズマ手刀がモアナーのアックスを弾くと、ほんの一瞬出来たスキを突き超至近距離のレールカノンを見舞おうと、照準を合わせより先にトリガーを引く！

「なつ？！ ゲアアーッ」

「うわあっ！！」

しかしラウラが放つその強引な攻撃すら、モアナーは躲すのだ。そのオートクチュールの十数基の小型スラスターが絶妙なコントロールで推進力を調整し、流れるような動きを実現する。制動ではなく流動。速度を落とすことなく転回することで俊敏に一夏達一人の背後に回り込むと、振りかざす一対の斧が無防備な背中に突き立てられた。

激しく削られるシールドエネルギーと、見せつけられる実力差……。

ハイパーセンサーが伝えるデータが、白式のエネルギーがイエローボーンに入ったことを示す。これではもう、零落白夜は使えない。一夏は歯を食いしばる。こうなつては彼に打つ手はなかつた。一体、どうすれば

その時だ。

彼の視界を、真紅のシルエットが遮つた。

そう、見えたのだ。

その背中から獅子の立髪のように開き、はぜる、暁光。

膨大な量の粒子の輝きが一夏の眼前一杯に広がる。目の眩むような鋭い光は、思わず顔を背けてしまはせう。

そして赤の背中は咆哮のような音を残すと、電光とみまう神速で再び上空へと飛翔していつてしまつた。

その場に絢爛舞踏の眩い輝きを残して。一夏とラウラに、もう一度戦う力をもたらして。

頭上には再び4対1。壮絶な絵面が展開されている。しかしもしもISの動きを『直線』に例えるとしたら、その動きはまるで『閃光』だ。見上げると、紅の疾風が大空を鋭く切り裂き、たつた4機しかいない敵を圧倒しているのだった。

牽制がわりに空裂を薙ぎ、その攻撃を散り散りに回避する4機のモアナー、それぞれに対し、今度は雨月のレーザーを見舞う。避けきれずに防御する1機を見付けると、篝は急接近して鋭い膝蹴りを叩き込んだ。

しかしモアナーはよく訓練されていた。チームワークは抜群だつた。別の1機が直ぐ様、援護のアサルトライフルを紅椿に向けて突き付けてくる！……が、もう既にそこには穿千とレーザーの集中攻撃が打ち込まれていたのだった。まずはその攻撃で最初の1機が戦闘不能になり、海面へ落下していった。

篝は動きを止めない。紅椿はすぐにまた上昇すると、今度は機体の最大加速でモアナー達を攪乱し始めた。時折斬撃を見舞い、また時折急接近し、相手の攻撃を巧みにかわしながら絶妙の距離を取りつつ、そしてじわじわとモアナー達のシールドエネルギーを削り取っていく紅椿。モアナーの側はその紅椿の速度に完全に振り回されるかたちとなつた。接近しようとすると回避され迎撃を受ける。距離をとつてしまつと今度はまったく捉えられなくなる。そうでなくとも消耗戦では圧倒的に分が悪いのだ。3機はどうとう作戦を変更した。人型では紅椿には追い付けないとみるや飛行形態へと移行し、フォーメーションで紅椿を追い詰めるつもりだった。

そしてそれは、　まんまと篝の思う壺なのだ。形態移行の瞬間を、彼女は見逃さない。

ほんの一瞬で急接近すると、1機目を斬撃の餌食にした。そして一番速く形態移行が終わりそうな別の1機には、左右の穿千を叩き込んで出足を封じた。虫の息になつた眼前のモアナーに素早くとどめの回し蹴りを食らわし、飛びついた次の1機には雨月と空裂で背中から串刺した。絶対防御が働くか働かないかの大ダメージに吐血する操縦者に、篝は小さく耳打ちする。その言葉でまるで生氣を失

つたように表情を無くすモアナーの操縦者を、紅椿の無情な刃が最後のひと太刀にかける。煙を上げて落下していくモアナーが激しく海面に激突した。これで、残るはあと1機。それも手負いの相手だ。勝負は決した。最早日の前のモアナーは簫の敵ではなかつた。

紅椿達よりやや低空で戦闘状態だつた一夏は、一連の戦闘を見上げるようになつていていた。彼の目にはすべてが一瞬の出来事のようだつた。簫は機体の性能を最大限に活かし、モアナーを圧倒していた。同じように紅椿の戦闘を目撃していたラウラは、はたと気付き、そして突然叫んだ。

「……そうか！」

彼女はハイパー・センサー越しの一夏に指示する。

「一夏、イグニッショーンブーストだ！　スピードで奴を振り回せつ！」

言われて一夏は返事をするよりも先に、直ぐ様行動を起こした。ノーモーションで繰り出すイグニッショーンブーストでモアナーとの距離を詰める。そしてすれ違うようにして何度も、何度も、雪片式型で相手に切りつける。ラウラの指示通り足を止めて切り結ぶようなことはしなかつた。ヒット＆ウェイを繰り返し、出来るだけ接触を少なく戦う。

その間、シユヴァルツェア・レーゲンは援護射撃に徹した。一夏が深く入りすぎると、レールカノンで牽制し、時折はAICで相手の自由を奪おうと攻めた。実際のところモアナーを捉えるまでにはいたらなかつたが、あくまで目的は陽動なのだ。それに一夏にとつてラウラのその行動は絶妙の援護でもあつた。

形勢はあつという間に逆転した。モアナー隊長機の攻撃は、一夏達にまつたく届かなくなつた。逆にスピードで翻弄され、モアナーはエネルギーをじりじりと失つていった。上空の4機と変わらない状況に、こちらのモアナーも同じ対応を取らざる負えなくなる。つまりは、隊長機はハンドアクセスもオートクチュールも粒子の粒に変

え、機体を飛行形態に移行するしかなくなつたのだ。

そしてその瞬間を、ラウラ・ボーデヴィッシュは待ち構えていた！

「うおおおつーー！」

敵の正面からなるも構わず、シユヴァルツェア・レーゲンがスラスターを全開で真っ直ぐに突撃する。それに対し、モアナーの反応は一瞬遅れた。形態移行の最中を狙われたことで、いつも簡単にラウラの接近を許してしまつた。慌てて粒子変換し呼び出したアサルトライフルで、モアナーは照準もろくに合わせられないままに迎撃する。が、対するラウラは左手の王の盾を無造作に投げつけた。弾丸のほとんどが、その投げ捨てられた盾によつて弾き返されてしまう。シユヴァルツェア・レーゲンはそのスキに弾道からわずかに機体を逸らしつつ、更にモアナーに向かつて突つ込んだ。そして、右手を前に突き出す。

「止まれええ！！」

シユヴァルツェア・レーゲンの右手がAICを発動する。そして遂に、モアナーの自由を奪うことに成功する。ラウラが叫ぶ。

「一夏ッ、今だ！ 零落白夜をーー！」

「ああっ、任せろ！」

ラウラの声が届くより先に、一夏の体はもつ反応していた。笄が先程の戦いの中でみせたモアナーの弱点に、遅ればせながら彼も気付いたからだ。ラファール・モアナーは乗り手を選ばない汎用機だ。しかし、そのスペックはあくまで『彼女』を基準に造られているに違いない。これはもしかしたら設計者も気付いていないのかもしれない、とんでもない致命的な欠陥だつた。

そう ラファール・モアナーの形態移行は、ラピッドスイッチがあつてこそ有効なのだ。そうでなければ換装に時間を使う分、戦闘中の形態移行は非常にリスクを伴う。掛かる時間がたとえほんの数秒だつたとしても、戦闘中に停止していればそれは空中に浮かぶ的でしかない。笄の戦い方を見て、そのことに一夏とラウラは気

付いたのだった。

一夏の振り下ろす刃が、身動きの取れなくなつたモアナーを遂にとらえる。勝負は決した はず、だつた。

「……一夏、どうした。何を躊躇している？！」

振りおろされた雪片式型。その切つ先を包んでいた零落白夜の光が、何故か次第に消失していく。そして刃はモアナーに届く直前で止まつてしまつた。一夏の表情が困惑しているのに、ラウラが気付く。

「一夏ッ！」

「違うんだ……この人の顔、戦つている人間の顔じゃない……」

「こんな時に、何をつ？！」

「まるで覚悟したみたいな顔で……戦意が、ないのか？」

「チッ！」

ラウラは舌打ちすると、左手のプラズマ手刀を展開した。躊躇う一夏の代わりに彼女がモアナーに飛びかかる。だが、その行く手を一夏が遮る

「ラウラ、ダメだ！！ 何か違う！ 間違つてる！」

「お前のほうこそ、間違つてるぞ！ こいつを叩かなければ、シャルロットがッ……！」

ラウラは立ちふさがる一夏を押しのけてモアナーを攻撃しようとすると、一夏がそれをさせない。ラウラの振り払おうとする手を白式は屈みこんで搔い潜り、シュヴァルツェア・レーゲンの懷に入り込むと、組み付いた。

「馬鹿者ッ！ いい加減に……」

その時だ。モアナーのパイロットの田が、一夏に向けられた。その唇が小さく動いた。

「やりなさい。もともとそのつもりだから……」

「なつ？！」

呴く言葉に、一夏は面食らつた。そして彼女の続く言葉に彼は激

しく動搖する。

「こんな戦い、本当は間違ってるのよ。……たとえあの子がフランスにとつてはジャンヌ・ダルクなのだとしても、私達すべての女性にとつたらあの子はグレース・ケリーなの。愛のために、地位も名声も祖国でさえ捨てて……。あのオレンジの機体は、今じゃフランスじゅうのI-S乗り達にとつて憧れ。勇気と誇りの象徴よ。それを汚すようなこんな作戦、本当は血を吐くほど嫌よ。もう……こんな命令、耐えられないの」

「…………」

一夏の目が彼女を捉えたままじっと見据えた。真意を、探ろうとした。けれど、その表情には感情を欠片も見つけることはできない。

「……お前は、本当にそれでいいのか？」

一夏は、低い声でモアナーの操縦者に問いただす。けれど、彼女の表情はさつきと少しも変わらない。

「ええ……。でないと、フランスは引かないわ。だから、お願いやつて頂戴」

唇を強く噛んだ。眉間に皺を寄せた。一夏の胸に苦いものが落ちた。

シャルロットを助けたい、その思いで必死で戦っていた。なのにどうだ。刃をぶつけ合つたこの相手も、実は決して本心で敵対していたわけではなかったのだ。それどころか命令や作戦といったそんな不条理な理由で、この女性は自身の意思に反して行動せざる負えなかつた。彼女もシャルロットを救いたい一人だつたわけだ。そしてそのためには、自身を……

「くつ！ ああ……わかつたよー！」

一夏は表情を固くする。ラウラを留める腕を解き、再び構えた。雪片式型がもう一度零落白夜の光を放ち始める。

「…………すまない」

「あなたが謝ることじゃないわ。……それより、彼女をよろしく。お願いやよ」

「ああ……」

そして一夏の手が決意をもつて振りおろされた。

一の手で必ずシャルロットを救い出す。あらためて一夏は、そう決意する。これはまだ自由を取り戻すための戦いなのだ。敵が誰でも、そこにどんな思いや願いがあつたとしても、自分はシャルロットを救うためだけに戦うのだ。そう、……割り切らなければ、彼はもう前に進めない気がした

隊長機を失つたことで、残つていた1機も投降した。この戦いは終わつたのだ。

そしてその事実は、深海で作戦行動中の友軍にも伝えられていった。

遂に、戦局が動き出した。

「タヒチより入電

クルーの一人が男に向かつて短く言つた。男はゆっくりとそちらに顔を向け、顎で合図を送る。クルーがほんの一瞬だけ躊躇し、しかし抑揚なく言い切る。

「モアノー小隊、壊滅。撤退しました」

「なつ？！」

男は表情を強ばらせた。後ろ手に組んでいた手を解き、ゆっくりと拳を作つて握りしめる。眉間に皺を寄せる。

「まったく……これだからIS乗りはつ！」

吐き捨てる、歯を食いしばつた。その歯ぎしりの音が周囲にも伝わるくらいの苦々しい顔を見せた。

「訓練工ースばかりで、実戦では作戦一つまともここなせない！だから女だけの小隊など役に立たんとあれほど言つたのだ。くそつ！」

腹立たしそうに狭い操舵室内を横切る。カツカツと荒々しく靴底を踏み鳴らすのは、男が生糞のサブマリーナー出ないことを表していた。海底に音を響かせるような行為は、自分達の居場所を敵に晒すようなものだからだ。操舵室のクルーの中にもそれを良く思わない者がいる。何人かのクルーは、見えないところで表情を歪めた。それを シャルロットは敏感に感じ取つていた。

「増援は？」

荒々しく言い放つ男の声に、通信担当らしきクルーが首を振つた。

「ありません。タヒチより指令、『貴艦は単独で進行、寄港されなし』です」

男はそれには応えない。指先で顎を撫で、じつと一点を見つめて思案した。その男の少し後ろから、一歩近づく影があつた。

「……出ますか、大佐」

大佐と呼ばれた男のすぐ後ろに立つた、スラリと背の高い別の男が呟くように言った。小さな声のはずが一本の線のように凜と、細く長く辺りに響く。その声は床に寝そべった体勢のシャルロットにまでしつかりと聞こえた。それで彼女はなんとなく理解した。この男の方こそ、この艦の艦長ではないか、と。軍人にしてはやや細身の身体。瘦けて頬骨の形がくつきりと出た顔立ち。しかし、独特の重厚な雰囲気がある。そして目は何処か遠くを見据えたような、一種、不思議な輝きをしていた。

シャルロットはその眼を覗き見た瞬間、ぞくぞくと背筋に何かが走るのを感じた。

彼女は慌てて視線を逸らせた。眼が合つたわけではない。ただ、その男の栗色の瞳がちらりと見えただけだ。が、全身が何かを察知したかのように総毛立つていた。

『この男は危険だ』、そう彼女の直感が語ついていた。握る手のひらに、じつとりと汗が滲んでいる……。

そんなシャルロットの様子には当然気づくことなく、大佐は鼻を鳴らすような仕草をすると艦長と思しき男に威圧的な声色で返すのだった。

「当たり前だ。相手はIS、それに専用機持ちはいえ、たかが17~8の小娘共だ。青臭い盛りの女などに、イチイチ私の崇高な計画の邪魔をされてたまるか! 艦を発進させろ。タヒチへ向かう」

「了解です」

艦長は短く返事をすると、操舵室全体にぐるりと視線を投げた。

「総員、発進準備。進路をタヒチにとる。海上のISに注意を怠る体が動くのを感じた。

事態はついに変化した。それも彼らのプランとは異なる方向に。

「了解

クルー達は、低く短く、深い返事で応えた。全員の真剣な眼差しが、それぞれの担当する計器に戻る。しばらくすると、ググツと船体が動くのを感じた。

シャルロットは胸の奥に温度の高い塊のよつた物ができるのを感じていた。実際、艦の外のことを彼女は知る由もない。けれど、この事態の変化は間違いないく『彼ら』の行動によるものだ。それは確信があった。次第に溶け出す熱い塊。それがじんわりと喉元まで迫つてくると、熱かった筈のそれは人肌よりもほんのちょっとだけ温かなエキスになつて、シャルロットの口内にいっぽいに広がつた。味なんてないはずなのに甘く、香りなんてないはずなのにまた甘く、シャルロットの感覚を優しく包み込む。これつて『希望』なのかな、とシャルロットは考える。そのイメージで出来た味や香りはそれぞれまったく違う印象なのに、全部が交ざつて思考と感覚の中に広がつていくと、たつた一つをモノを連想させる。

短く切つた黒髪。ちょっと日に焼けた肌。優しい瞳。なぜか一人の人物を思い起させる。

どうしてそんなふうに思つたのかは彼女自身わからなかつた。だが、決意を促すきっかけにはなつた。

「うん。必ず帰るんだ。だから……」

シャルロットはひとりごちに小さく呟いた。そして覚悟を決める。不安要素はたくさんあつた。特に、この艦長に関しては底がしない恐怖すら感じた。けれどもしも機会を逸すれば、二度と再会することは出来ないかもしれない。その恐怖は、ほかの何よりも耐えられないから。そして、

ついにシャルロットは動く

「……ガツ、あああつ！－ あ、熱いッ、か、体が焼けるよつて
！ あ、熱い、助け……て」

突然、シャルロットは床をのたうつ回つた。激しく体を捻じ曲げ、

転がり、時折壁に背中を打ち付けた。

顔を真っ赤にして、苦痛を訴える。歯を食いしばっても耐えられず、嗚咽をもらし、涙もこぼした。荒く息をつき呼吸すると、うまく空気を吸い込めずにむせ返す。そしてまた体の中から走る痛みと焼けるような熱の波に襲われ、もんどうりをうつ。

「ああっ、ああっ、ああっ――！」

激しく悲鳴を上げた。口元から涎を垂らし、頭を振り回した。いつも彼女では有り得ない、取り乱した姿。それをしばらく冷淡な視線で見ていた大佐が、しかし突然気付いたかのように色を失った。

「……まさか、ウイルスが……切れるのか？！」

「なつ？！」

艦長の男が絶句した。刹那、シユツと息を呑むと素早く動作する気配。だれかが何かを取り出した。そして、ガシヤツと金属のスライドする機械的な音が室内に鳴り響いた。シャルロットは自分にその『何か』が向けられたのを感じ、ほんの一瞬身を固くした。

しかし艦長の叫び声がすぐに大佐を制しに入る。

「いけません、大佐！ 撃つては……殺してはなりませんっ――！」

「……貴様。何故、止める」

「(自身の計画を捨てるおつもりですか？」

艦長は諭すように少し低い声で言つた。ギリツと奥歯を噛み締めるような音が聞こえた。

「……ッ。しかし、ここでの娘がIISを起動できるようになれば、計画どころか全てが終わるぞ」

チャツと金属が鳴るのが聞こえた。どうやらシャルロットに向けられた銃口は下ろされたようだ。彼女は小さく「うつ……」と嗚咽をもらしてみせた。背中に、一人の男の鋭い視線を感じた。

一呼吸ぶんの沈黙があつて、その後、艦長が切り出した。

『『奴等』から渡されたウイルスについては、我々もその全貌を理解している訳ではないのです。このような発作を起こしたらすぐに効果が切れるのか、それだってわかつていない。ならば今は、計画

を維持するべきです」

「う、うむ……」

大佐の低い声がした。銃を仕舞う革と金属の擦れる音がする。「我々はこの娘をタヒチに……本国に必ず送り届けなければなりません。他国の手にこの『脅威』を渡さぬようにするのが、この作戦の目的なのはお忘れではないはずです。だが、あくまで生かしていく必要があります。今やこの娘は世界じゅうで引く手数多の『時の人』だ。その存在を完全に消しることは非常に難しいのです。万が一、フランスが彼女を手にかけたとわかれれば、我々はあつという間に世界の敵にされてしまいます」

「わかつて……」

「大佐は、この作戦の成功で准将に昇進していただかなければならぬ人物です。そしてIS主体、女性が幅をきかせる軍を、正しく再編成して頂く必要があります。そのあなたが、こんなところで手を汚すのは、まずい。自覚を……もつとしつかりと持つて下さい」艦長の声が語調を強くした。それに対し、大佐が舌を打つ音がかすかに聞こえてきた。

「ふんっ！ もういい、わかつて……！」

大佐がまた荒々しく音を立てて移動していく。どうやら部屋を出ていこうとしているようだ。その背中に艦長が言葉を投げる。

「……速度を、上げます」

「勝手にしろ」

最後の一言を残し、大佐は操舵室を出ていった。シャルロットはその様子を、壁に頭を押し付け、痛みに憔悴したようにぐつたりとした姿のまま伺っていた。

艦長がクルーに指示を送る。ゆっくりと船体が加速していく。床に倒れた体勢のまま、シャルロットはじつと目を閉じて祈った。

自分の命を掛けたこのシグナルが、彼らの元に届くようだと。

「鈴さん、簫さん…………見つけましたわ
その祈りは、蒼の少女に届く

「大きさから言って150～160m。進路は……太平洋南東。急に加速し始めましたわね。おそらく、ラウラさん達との戦局が思わずくなかったんでしょう。自力で目的地にたどり着かなくてはならなくなつたんですね」

ブルー・ティアーズ各機からリアルタイムで送られてくる膨大なデータをハイパーセンサーで解析しながら、セシリアは小さく頷いた。

「間違いありませんわ。……鈴さん、簪さん、聞こえてまして？」

セシリアは回線越しに一人に呼びかける。すると、

「……ッ！ やつと継つたわ。ちょっと、セシリア！ アンタ、回線切つてたでしょ？！ 何回、呼びかけても返事がないじゃないよつ！？」

開いた回線からは応答よりも先に、苦情が飛んできた。そして鈴が堰を切つたように捲し立てる。

「……？ ああ、そうでしたわ！ わたくし、集中するために鈴さんの回線を切つていたんですね。忘れてました」

「アンタねえ！ なんかあつたら、一体どうするつもりだったのよ？！」

「そうですけど……わたくし、あなたの大声を聞きながら纖細な作業をできるとは思えませんわ。これはいわば作戦成功のための必要悪でしてよ」

「い、……いい度胸ね。アンタ、背中に気を付けなさいよ。いつか必ず敵ごとぶつた斬つてやるから！」

鈴はセンサーのゴロー越しに、額に幾つも血管を浮かべる。そんな一人のやり取りを戒めるかのように、簪の回線が割つて入つてきた。

「一人とも……いい加減にして。……セシリア、一夏達が増援を退

却させた……」

「みたいですね。おかげでわたくし達のお皿當ても動き出しましたわ。ターゲットの位置、送りますわね」

そう言うと、セシリアは鈴と簪の二人にブルー・ティアーズからのデータを転送する。それを見た二人から歓声が上がった。

「セシリア、アンタ、やつたじやない！ お手柄よ！」

「……凄い。確かに理論上は可能だつたけれど、……はつきり言って操縦者の感性頼みだつた……」

自身の責任を全うしたことの安堵もあつてか、セシリアは持ち前の自信家つぶりが戻ってきた。「ふふん」と軽く鼻を鳴らすとお決まりの腰に手のポーズも復活した。

「わたくしとブルー・ティアーズに不可能なんてありませんわ。当然の結果でしてよ！」

しかしさつきの仕返しもあつてか、そんなセシリアの鼻つ柱を鈴が折りにかかる。

「……けど、このパターンでいつもアンタ、失敗してるわよね。もしかして、これもでつかいクジラとかだつたりするんじゃないの？」

「し、失礼ですわね？！ 大体、100m以上もあるクジラなんて、聞いたこともありませんわ。ぜえーつた、間違いありませんわ！」「ほんと？」アンタだつたら、世界最大のクジラを発見する確率の方が高い気がするわ」

「ちょ、ちょっと鈴さんツ、ふざけないで下さい！ そこまで言うのなら、わたくし、賭けてもいいですわよ。お気に入りのロイアル・コペンハーゲンの……」

「二人とも！－！」

再び再開した二人の小競り合いを簪の大声が制した。普段、そんなふうに声を張り上げることのない彼女だから、セシリアも鈴もちよつとびっくりして黙り込んでしまう。

「……い、いい加減にして。……鈴、こっちはあと数分でターゲッ

トと接觸……」

思わずとつた自分の行動に、簪はちょっと恥ずかしそうに頬を赤くしている。そんな彼女の表情に、鈴もセシリアもちょっと反省するのだった。簪だって一生懸命なのだ。それに、今はふざけている場合ではない。

「簪、ごめん」

「わたくしも謝罪いたしますわ。すいませんでした」

「……ううん、いい」

三人は気持ちを切り替え、ターゲットに向かって移動した。それぞの役割を果たすためのポジションをとり、素早く幾つかの約束事を決め、作戦を再確認し合う。と、言つてもブルー・ティアーズは潜水艦を発見するため絶えずBTビームを海中に放ち続けていた関係もあって、そのエネルギーの大半を消費していた。セシリアの役目はラウラ達との通信・連絡が主だ。

「……ラウラさん、聞こえまして？ ターゲットを発見しましたわ。
……ええ、これからそちらに座標を送りますわ……」

彼女はプライベート・チャネルを通して、離れた場所にいるラウラ達に連絡を取り始めた。

そして鈴と簪の二人もそれぞれ配置に着こつとしていた。海中の簪は、相手にさとられないようにスラスターを使わず跳躍と歩行で移動。緩やかな下りの海の床を跳ねるように進み、前方の急に深くなつたその場所がセシリアの示す場所だった。そして彼女はついに目標をその目で確認する。

「……いた。間違いない……」

海中を低速で進む潜水艦。ISのセンサーが画像処理をしているからこそ見えるが、暗い海を進む巨大な黒い影、ただ闇雲に潜つただけでは確實に発見はできなかつただろう。本来であれば光のあまり届かないような場所だ。ISの優れた機能を有しても、海上からの発見もほぼ不可能に違いない。

「絶対に……逃がさない。鈴つ！」

簪は上空に待機するパートナーに合図を送る。

「ええ、いつでもOKよ！」

それに気合の入った声で答える鈴が、甲龍の両手に双天牙月を構えた。そして目では確認できないものの、確かにそこにいる目標に意識を集中する。

「……鈴。軍事機密だからデータが正確とは言えないけれど、……おそらくは原子力潜水艦。直接攻撃は……ダメ

「わかつてゐるわよ、そんな事つ！」

そう言つた口元が上がる。彼女の集中が高くなつた時の癖だ。鈴はいつの間にか不敵な笑みを浮かべて海面を鋭く見据えていた。

「……じゃあ、作戦……開始！ 行つて、『新・山嵐』……」

彼女の呼びかけを受け、打鉄式式の背中から4つの大型コンテナがパージされた。それぞれがスラスターを開き、海中を高速で前進する。目指すはあの潜水艦だ。

半年前、打鉄式式が第一形態に移行した際に変化した山嵐は、12門×4機の独立稼動型誘導ミサイルを搭載した『コンテナ型ミサイルビット』に進化していった。しかし、肝心のマルチロックオン・システムは未完成、おまけにコンテナ・ビット自体の制御にも意識を取られる羽目になり、事実上、簪はこの武装を100%の可動率で使用したことはなかつた。しかし先日ようやく完成したマルチロックオン・システムを搭載したことで、とうとう簪は自在にこの装備を使いこなすことができるようになつていたのだ。

「いい……攻撃するんじゃない、水圧で押し上げるの……みんな、お願ひ

簪が目を閉じ、集中する。48の意志が動き出す。

「……海底の隆起を計算してここで爆発、破片を船体に当てないよう別角度からもう一発、爆破……」

簪は集中し、イメージをより鮮明にしていく。まるで喰えるように咳き、指示ではなく問い合わせるように一つ一つの『意志』に話しかけていく。その間に4機のコンテナ・ビットが所定の配置を取つ

た。簪は一息吸い込むと、目を見開いた！

「……全弾、発射……コンテナ・ビットはシールド展開……！」

4つのコンテナからそれぞれ1-2のミサイルが、一つ一つ意思を持つているかのように飛び出して行く。そしてコンテナ・ビットの方は再び加速すると、今度は船体に取り付きエネルギー・シールドを展開した。ミサイル爆破の衝撃を直接船体に与えないためだった。

「来る……！」

簪の目が潜水艦の船首部分に向いた。そこから大きな音を立てて6発の魚雷が発射される。目標はどじゅらコンテナ・ビットのようだった。

「……守つて、新・山嵐……」

簪の言葉に何発かのミサイルが急激に進路を変え、魚雷を迎撃に向かつた。そしてあつという間に潜水艦からの攻撃を全弾撃ち落としていく。それは当然だった。目的の場所にただ向かつて行くだけの意思のない物体と、各個が何をすべきか考えて行動する生きた物体。性能の差は歴然だ。

「……さあ、みんな。……泡のベッドで押し上げるの……できるから、私達なら……」

簪が両手を広げてみせた。すでに各ミサイルはマルチロックオン・システムによつて独自に稼働している。それでも彼女は、まるで思いを伝えるかのようにすべての『意志』達に呼びかける。

「……クリック」

次の瞬間、海底を幾つもの衝撃が走つた。そして爆発、爆発、爆発。

それはまるでビル解体のように計算された破裂の連続で、海中には突如巨大な高密度の泡の塊が発生する。そして、その下でまた新たな爆発が起こる。

圧倒的な量の圧力の塊が浮上する力に持ち上げられ、海底から黒い鉄の塊が押し上げられていく。そして尚も追いかけるような爆発がその下でいくつか起こり、グングンと物体は海面に向かつて上昇

して行く。

「鈴ツ…………！」

「まつかせなさいってえ……言ひてるでしょーがツ！！」

上空から猛スピードで落下してくる甲龍が、両手に構えた双天牙月を海面に向けて振り下ろす。

「ぶつつつたぎれええ――！ 双天牙月・炎牙あ！！」

掛け声と共に真っ赤に刀身が燃え上がり、それが振り下ろした海面を蒸発させながら切り裂いた。鈴の眼下の海面が、大きく真っ二つに割れる。その割れ目から迫り出すように潜水艦の船体が飛び出してきた。強烈な圧力に押し出され、物体は一端、数m空中に浮き上がってしまう。そこへ、

「今ですわ。行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

セシリアの号令でブルー・ティアーズが潜水艦の艦底に滑り込む。その重量を支えることなどできないが、船首を上げてしまえば注水は叶わない。

「やつたわ！ どうよ、あたしにかかればこんな作戦くらい！！」

「ええ、わたくしとブルー・ティアーズがあれば、どんな作戦だって成功ですわ！」

簪がゆっくりと海上に打鉄式式を浮上させた時、犬猿の仲の二人はまたも懲りずに遭りあっていた。

「にににに、」

「ふぬぬぬ、」

「…………もう、…………知らない…………」

「なに、見付かったか！！」

ラウラの表情が明るくなつた。声が熱を帯びた。

作戦を立案した簪を信頼はしていたが、『目標』が自分達の予想したルートとはまったく違う進路で、すでに索敵海域を離脱してしまつてゐる可能性も否定はしきれなかつた。親友を失うかもしれない不安は常に胸のどこかにずっと引っ掛かつたまま、ラウラの精神を時間と共に少しずつ蝕み、焦りを生んでいた。だがリーダーを任せられた以上、自分の弱気は隊の士氣にも関わる。不安な顔など見せられるはずはない。

そこへ入ったセシリアの報告。

ほんの一瞬だが、彼女は安堵した。しかしさすがは現役の下士官クラス、すぐに普段の冷静なラウラ・ボーデヴィッヒに戻り、気を引き締める。

「すまない、セシリア。戻るにはだいぶ時間が掛かる。お前達だけで制圧できそうか？」

指示を送りながら、ラウラはセシリアから届いた座標を一夏と簪の二人にも素早く転送した。

『目標』の現在位置は日本からそう離れた位置ではない。そして自分達は南太平洋の洋上……。とても数分でたどり着ける距離ではなかつた。

「二人共、座標は確認したか？ 行きと同じ方法で戻るぞ。シュヴァルツェア・レーゲンの最高速度に合わせる。いいなつ？」

少しでも時間が惜しい。ラウラは機体を日本の方角に向け、発進の準備を整えながら一人の顔を見た。

一夏、簪が共に頷いたのを確認すると、

「行くぞ！！」

シュヴァルツェア・レーゲンがスラスターを全開で発進する。そ

れを白式と紅椿が追いかける。ぐんぐんと速度を上げる二機は、時折簾の絢爛舞踏によつてエネルギーの補充を行いながら、全速力でセシリ亞達の元へと急ぐのだった。

しかし、その時

「……ラウラ、問題が発生……」

オープン・チャネルから簪の声が聞こえた。その声は普段の簪からあまり聞こえてこない、感情を露わにした焦りの声だった。

くだらないもめ事をする一人を律するつもりで、簪は彼女達のところに向かおうとしていた。しかし、突如ハイパー・センサーのアラートが悲鳴を上げて、警告を発する。

「えっ？！……ロック、された？……」

慌てて田を走らせると、艦上部の発射口が開き、矢継ぎ早にミサイルが打ち出されたのだ。

「……対空ミサイル……I-S相手に、効果があると？……新・山嵐！」

簪は直ぐ様ミサイルビットの1機を射出して迎撃に向かわせた。ほつておいても鈴やセシリ亞には問題ないはずだが、そうはいつてもセシリ亞はかなりエネルギーを消耗している。無駄な消耗は避けさせたい。

「アンタ達、バッカじゃないの？ こんなもの、全部切り落としてやるわ！」

「通常兵器ですって？ わたくしのような高貴な人間が、そのような下々の遊具に戯れることなどありませんわ。さあ、鈴さん。わたくしの代わりにどうぞ思う存分おやりになつて下さいまし」

「はあ？ 素直にエネルギーが少ないからって言えばいいのに……」

まったく、いちいちムカつくロール女よね。そのへらず口も閉じて
いたほうが、エネルギーの浪費が抑えられるわよ

「なつ？！ し、失礼ですわね、いいから早くやつてくださいまし
つ！」

「言われなくたって、わかつてゐるわよ。でりやああーーー！」

上空の二人にも動搖など微塵もない。余裕の笑みをみせた鈴が双
天牙月を振りかざし、一番接近していたミサイルを横薙ぎに切り裂
いた。

「こんなのハ工たたきよりもチョロいわ……つて、エツ？！」

当然起ころはずの爆発に備え、鈴はほんの一瞬顔を背けていた。
しかし爆発は起こらない。それどころか、ミサイルを切つたはずの
手応えすら残らなかつたのだ。怪訝に思つて刀を見ると、

「なんで？ 双天牙月が消えて……」

何故か刀先は、ごそっと半分以上が消失してゐたのだ。しかも、
折れたのではない 消えたのだ。そして次の瞬間、突然、鈴の目
の前で激しい粒子の爆発が起つた！

「えつ、なに？ …… キツ、キヤアアーーーー！」

それまで腕組みのまま余裕の表情だつたセシリ亞が、その鈴の悲
鳴で異常事態に気付いた。

「な、なんですか？！ クツ、ティアーズ達、落としなさい！」

慌ててブルー・ティアーズを射出するも、明らかに出遅れていた。
直撃コースのミサイルが、もう間近に迫つてゐる。セシリ亞は咄嗟
につま先のインター・セプター？を抜き、迎撃体制を取る。だが、山
嵐のミサイルが間一髪でその攻撃を防いだ。マルチロックオン・シ
ステムが見事に相手の対空ミサイルを捉えた……のだが

「キヤアアアッ！！」

セシリ亞は全身を襲う電撃のような激しい痛みに絶叫する。

彼女の目の前で直撃したはずの一つのミサイルは、鈴のときと同じように何故か忽然と姿を消してしまつたのだ。まさに消滅したようだつた。しかし、あまりに予想外の出来事にセシリ亞が自分の目

を疑っていると、今度は眼前で強烈な閃光が炸裂した。閃光は先程のミサイル同士がぶつかりあつた場所から発生し、セシリ亞がその光の粒子に触れた途端に、ブルー・ティアーズの装甲に衝撃が走つたのだ。

セシリ亞は激しい痛みに苦悶の表情を浮かべた。

「なつ、なんですの、この攻撃は？！ 体が、いつことをききませんわ！」

体を走る電気に身動き取れずいる間も、潜水艦からのミサイル攻撃は続く。しかし、それらは新・山嵐のミサイルが即座に撃ち落として難を得た。セシリ亞を襲う痛みも次第に和らいでいく。ようやく体の自由を取り戻し、彼女は肩で大きく息をつきながら、なんか意識をはつきりさせようと首を何度も振った。それで気が付いた。

「はあ、はあ……くつ！ 一体これはどういうことですの……？」

セシリ亞は自分の姿を見て、驚いた。ブルー・ティアーズの装甲はバックパックと脚部の装甲を残し、ほとんどが消失していたのだ。それに24機あるはずのビットも8機しか残っていない。

「セ……セシリ亞……」

力ない声が聞こえ、彼女は顔を上げた。すると空中に浮かんだ影が、ゆっくりとこちらに振り返るのか見えた。それは確かに鈴の甲龍のはずだ。だが、その姿は見る影もない。

「鈴さん、それ……どうしたんですの……？」

「あ、あたしだって、全然意味わかんないわよ……。だけど……」

「そう、ですわね。……これはおそらく『対EIS兵器』。しかも、こんな攻撃が出来る兵器なんて、データのどこを探しても見つかりませんわ」

セシリ亞の見詰める先 全身の左半分の装甲とバックパックの大半、スカート部分のスラスターも多くを失つたまさに満身創痍の甲龍 が、片肺飛行でなんとか姿勢を制御している。鈴本人は否定するかもしれないが、外から見れば一目瞭然だった。もう甲龍は戦えない。飛行するのもやつとの状態だ。

「やられましたわね。こんな隠し球を持つていいなんて……迂闊でしたわ」

「ちょ、ちょっと簪は？！ ねえ、簪。アンタ無事なの？ ねえ、聞こえないの？」

鈴が気付いてセンサーに向かつて問い合わせるも、簪の反応はない。第一、自身のセンサーがまともに機能しているのかもわからない状況だった。これではコンタクトの取りようもない。

「参りましたわね……これは状況的にかなり不利に……」
そう、セシリ亞が呟いた時だ。

「IIS学園の小娘共つ、遊びの時間は終わりだ！！！」
低くて野太い男の声が、彼女達の耳に飛び込んできた。

「簪、お前は無事なのか？」

「……私はその粒子の光から遠いところにいたから……ミサイルはほとんど山嵐が落としてくれたし……」

簪はそう答えた。

「それで、現状はどうなつている！」

ラウラの問に、簪は自分をまず落ち着けるかのようにゆっくり一呼吸してから、答える。

「鈴とセシリ亞は武装解除させられてる。……それに元々飛行するのもやつとの機体損傷率……こちらに打つ手はない……」

「しゃ、シャルは！ 簪、シャルはどうなつてるんだ？！」
たまらず一夏が二人の会話に割り込んだ。

「……シャルロットは、人質……銃を突きつけられてる。それに……なんらかの方法でIISを展開できないようにされてるみたい……」

……多分、今のシャルロットに絶対防御は……なこと思ひ……」

一夏は低く息を呑んだ。

もし絶対防御がなければ、たとえ訓練を受けた操縦者とて『只の人』でしかない。突き付けられた銃口から出る弾丸を避けることなどできないし、ましてやその弾から身を守るすべなどない。

「のままでは、
シャルロットの命が危ない……」

一夏の悲劇はコジゴが警べ。

「アガハ、何がお仕事ですか？」

「ぐう、……今はともかく一秒でも早く辿りつくほかはない。一夏、
篇と二人で行け。シユヴァルツェア・レーゲンの速度に合わせてい
ては、時間を無駄にしてしまう。

ラウラは先行していた自分の機体の高度を下げ、一人に道を譲つた。一夏は筈に向かって叫んだ。

一
篇、
頼む！
シャルが危ないんだ、協力してくれ

一夏の言葉に、篠は答える代わりに紅椿の速度を上げた。今はともかく時間が惜しい。一夏は彼女の行動を承諾と受け止め、全スラスターの推力を最大に加速する。

「行つゝええーー、白式ーー！」

エネルギー効率を全く無視した、イグニッショングースト並みの最大加速で白式が飛ぶ。そしてその横にはぴったりと紅椿が並んでいた。

一夏は唇を噛んで感情をなんとか抑えようとする。けれど、センター上のエネルギー・ゲージがみると減っていくのを見ると、それがなんだかシャルロットの命も一緒に吸い取っていくみたいに思えててしまうのだ。その、一度落ちてしまった負の概念から抜け出せなくなると、焦りと苛立ちがどんどんと肥大して一夏の胸を搔き乱

すのだ。

「つおおおーー！ 急げ、白式。急いでくれッー！」

一夏と篠は機体の限界まで上げた速度のまま、必死で飛び続けた。

「くつ……」

「無様ですわ。こんな奴の言いなりになるなんて」

一人は表面をつくつて咳いた。鈴は双天刃用を投げ捨て、龍砲を肩の装甲ごと粒子に変換する。セシリ亞も潜水艦の足止めにしたブルー・ティアーズのスラスターを閉じて全基を沈黙させた。もともと先ほど受けた攻撃で一人の戦闘力はほとんど失われていたが、これで彼女達は完全に無防備な状態になってしまふ。

「さあ、アンタのお望み通り、武装解除したわよ！　いい加減にシャルロットを開放したらどうなの？」　鈴が叫んだ。しかし、相手は不敵な笑みを浮かべて答える。

「君らに交渉する権利はない。イーシアチブは我々にあるのだ」
潜水艦の甲板に立つ男は左腕をシャルロットの首に絡め、右手に構えた拳銃を彼女のこめかみに押し付けている。

「まあ、そう言つとは思つてたけどね。言葉にされるとやつぱりムカつくわ」

「まったくですわね」

鈴とセシリ亞は二人揃つて吐き捨てた。残念ながら彼女達に打つ手はなかつた。主導権は相手に握られていたし、できる抵抗と言つたら相手に聞こえない程度に悪罵をつくくらいしかない。

ブルー・ティアーズによつて海上に持ち上げられていた船体が、くびきを解かれ着水した。艦は波の影響で何度も大きく上下するが、やがて揺れは緩やかになる。男はシャルロットを腕に抱えたまま、その様子を満足そうに見て笑つた。

男に拘束されているシャルロットは、後ろ手に縛られ、口にはテープのようなものを貼られてしゃべれないようにされている。だが、

そんな事は大した問題ではなかった。なによりも鈴達二人を焦らせたのは、こうして目の届く場所まで接近してなおシャルロットとプライベート・チャネルが継らないことだった。

『セシリ亞……どう思う?』

『わかりませんが、トラブルとは思えませんわ。きっと何か人為的な干渉を受けてISを起動できなくされているんだと思いますわ』

『そんなこと、ほんとに出来るの?』

『わ、わたくしだって、こんなケースは始めてですよ。あくまで予想を言っただけです!』

『つつつかえないわねえー。ちゃんと調べなさいよ』

『ムツ! 鈴さんこそ、『自身で調べたらよろしいんですわ』

『あたしはいいのよ。』 $24 \times 365 = \text{実行部隊}$ だし? 考えるのは後回しにするよ』

小声でもつて状況確認と作戦会議を行う二人。しかしその様子は男の目に付いてしまう。男はシャルロットに突き付けた銃口をさらに強く押し当て、声を張り上げた。

「お前ら、何をこそとしゃべっている? いいか、自分達の立場をちゃんと理解したほうがいいぞ!」

男の腕でシャルロットが苦悶の表情をみせた。鈴もセシリ亞もそれ以上言葉は交わすのを止め、息をじっと潜めた。

「チツ、わかつてるわよ」

「……一体、あなた方の目的はなんなんですか?」

セシリ亞の問いに答える素振りもなく、男はシャルロットを荒っぽく引きずつて進み、ハッチに向かった。鈴、セシリ亞がさらに焦りの表情を浮かべる。もしあのまま再び海中へと逃げられてしまつたら、自分達の損傷した機体では発見できたとしても、絶対に捉えることはできないだろう。そうなれば、シャルロットの命だつてどうなるかわからないのだ。二人は鈍い音をたてて歯を食いしばった。

しかしその時、突然海面が荒れ初め、潜水艦はその船体を大きく

左右に揺ら出した。激しい揺れで男は立つていてもままならず、慌てて甲板に膝を付いて体を固定しようと掴まった。

「な、何だ？　なにが起こっている？！」

男はかぶる波飛沫に目を細めつつも、周囲の海面を探った。

ハワイ沖を通過した頃から空にはどんよりとした雲が張り出した。横風、強風が吹いて、嫌でも一夏の胸中を激しくかき乱していく。目指す場所にはまだ遠く、たどり着くにはあとどれだけ時間がかかるかもわからないのに、事態はほんの一瞬たりとも待ってはくれない。それはセンサーに映る簪の表情を見るだけで十分わかる。

『一夏、急いで！　……私一人じゃ、大した時間稼ぎにもならない……もう、限界』

海中にミサイルを放ち、その爆風で大波を発生させながら話す簪の顔が必死に訴えるのを見て、一夏はただ自分を見失わないようにするだけ精一杯だった。簪、鈴、セシリリアの会話をオープン・チャネル越しに聞いていれば、詳細がわからずとも事態が一刻の猶予もない深刻な状態であることは明白であつたし、もしも今取り逃がしてしまつたなら、あの潜水艦を再び捕獲できる可能性が低いのもわかつていた。一夏は焦りにジリジリとする思いを噛み潰すかのように、歯を食いしばった。

「ぐぐぐつ……！」

スラスターは高熱に焼けて真っ赤になっていた。十分な強度を誇るはずのEISボディーが、装甲の限界近い稼働に悲鳴を上げている。だが状況は、それでも速度を緩めることを許さなかつた。もう、一夏達の到着を待つ以外に、シャルロットを救う手だてはなくなつてしまつたのだ。

超高速によつて機体だけでなく人体にも負荷の掛かる状態であつてまだ、一夏は一秒でも早くシャルロットの元へたどり着こうと必死に足掻いていた。しかし

『ビーッ！！』

アラートが鳴つた。エネルギーの残量がもう僅かしか残つていなことを、ハイパー・センサーのパワーゲージが黄色く知らせている。

「篝、頼む！ もうすぐエネルギーが切れる！－！」

一夏はすぐ隣を飛ぶ篝に向かつて叫んだ。絢爛舞踏によつてエネルギーのチャージを行うためだ。篝は首を縦に振つて答えると、意識を集中させた。だが、紅椿の展開装甲からは少しも光の粒子は出でこない。

「どうした、篝。時間が惜しい、急いでくれ」

急かす一夏に篝は再び頷き返すのだが、その表情には何故か焦りがみえた。口元を歪め、眉をしかめている。しかし今の一夏には、そんな彼女の小さな変化を気にしている余裕はなかつた。

「何やつてんだ、篝ッ！－！ いいから早く絢爛舞踏を……」

そう言つて紅椿の肩を掴みガクガクと揺さぶるのだが、篝は一向に絢爛舞踏を発動しようとしなかつた。そしてとうとう白式のエネルギー残量はレッドゾーンに入つてしまつ。一夏は止むを得ず白式を停止させて篝に詰め寄つた。

「篝、どうして絢爛舞踏を使わないんだ。今は一刻をあらうう事態なんだぞ！－！」

「…………」

「篝つ！－！」

一夏は目に怒りの色を溜めて篝に迫るが、彼女のほうはその視線を嫌つて顔を俯かせた。ぐつと口を真一文字にしたまま、遠くの空を見つめている。それはこれから向かうべき方角、シャルロットのいる場所だつた。

「……出ないのだ」

「えつ？」

不意に聞こえた小さな声は、一夏の耳を一度通り過ぎてしまつ。

「今、……なんて言つたんだ」

「…………」

「笄つ。お前、今なんて」

一夏は無理矢理腕に笄を振り向かせ、彼女の瞳を見据えた。が、笄はすぐに目をそらそうとする。その時、ほんの一瞬だけ重なつた視線から見えてしまつた笄の感情。眼の奥はまるで怯えるみたいに震えていて、そらす瞳は潤んでいるようにも見えた。

「ほつ……き?」

「……出ないのだ、絢爛舞踏が。センサー上は稼働していることになつてているのに、まったく動かないのだ……何故かはわからない。だつて、さつきまでは確かに使えたんだぞ。それなのに、どうして

……

「そんなん。こんな時に、なんで?!

「わからないと言つただろう!— だが、これではシャルロットを助けには……」

一瞬、苛立つた顔で一夏に迫つた笄だが、言葉を言い切らぬうちには表情が一辺した。突然、顔から色が抜け落ちるみたいに青白くなつて、わなわなとする唇が音にならない声で何かを言つた。

「どうした、笄?」

「……違う。私は、そんな……」

「えつ、どうしたんだよ、笄!」

「私は……だつて親友じゃないか。そ、そんな」と思つてなんか……違つぞ、私は……

「おいつ、何、言つてんだ」

両手で頭を抱えて何事か叫び出した笄を捕まえようと、一夏が手を伸ばす。しかし笄はその手を激しく振り払い、手で覆つた顔を背ける。

「見るなつ、私を見ないでくれ!— 一夏、私を見るな……頼む」

「笄……お前、一体……?」

一夏は、突然豹変した篠の様子に戸惑いを隠せない。

「私は……私の心はそんなに下劣な事を……い、いや嘘だ。嫌だ、絶対にこんなのは本当の私ではないのだ！ だって、私はちゃんと助けようとしているじゃないか……ただ、絢爛舞踏が上手く使えないから……」

「待て、篠。どうしたんだ、しつかりしろ！」

「絢爛舞踏……使えるはずだ。私は……違う。そんなこと、これっぽっちだつて……」

そう言って彼女は再び絢爛舞踏を発動させようとする。そしてついに背中からは光の束が溢れ出し、篠の顔には安堵の表情が写ったのだが……

「……い、いや、違うぞ……これは私の思いではない。絢爛舞踏、私は……」

最高出力時、輝く日輪のような姿の『それ』は今は見る影もなく、まるで荆棘のような赤黒いシルエットで篠の背中から伸びて彼女の体を覆い隠さんと包む。

そこからひと振りの枝状の光の束が伸び、白式に振れた瞬間

「なつ？！ ぐあつ！」

『ビーナーッ』

鋭い電気のような衝撃が一夏の全身を貫き、そしてとうとう白式のエネルギーはゼロになってしまう。待機状態へと移行してしまった白式。そして頼るものを見つた一夏の体は海面に向かって落下してしまってしまう。

「ああーっ、一夏あ！ 私は……私はあああッ」

悲愴な叫び声が一夏の耳に届く。

そこに絶望はなかつた。

あるいは遠ざかる真紅の機影と、あらためて痛感する自身の無力さ。

猛スピードで海面に向かつて落下しているはずの体は確かに自分のモノのはずなのに、その実感は全くない。或いは織斑一夏という存在自体の意義が、彼の心の瓦解によつて大きく失われたから、そういう感じるのであつた。

シャルロットは、救えない。

もう誰も彼女のもとにたどり着くことは出来ない。

そう　　自分自身も。これはもう、決して変わらない現実だ。

視界と思考を急速に蝕んでいく白い大波に、一夏は絶対防御による致命領域対応の影響を感じる。意識の糸が急速に細くなつていき、そして最後は途切れてしまう。だが、この白い夢が覚めても、シャルロットは戻つてこないのだ。なのにいつか必ず自分は目を覚ましてしまう。『約束されたカタストロフィー』、これがISという人類史上最高のテクノロジーに課せられた責なのだとしたら、たつたの17歳の少年にはあまりに重い義務かもしれない。

だが何を呪うかも、誰を恨むかも決まらないうちに、一夏の世界は完全なる『白』に飲み込まれてしまつ。

そして、彼は最後の夢へと墮ちていく

白の世界に浮かぶ身に、波紋ほどの小さなたゆたいが寄せて
いる。

ザザザー、ザザザー、……と遠くのほうで波の音が聞こえたよ
うな気がした。

何もないはずの世界。希望も、未来も、全てが白で塗りつぶされ
た世界。

そんな場所に自分以外、人も物も存在するはずはないのに。

「ああ、また来んだあー。相変わらず……つだ……よね」

何一つあるはずのないここで誰かが、まるで呆れたような声で言
うのが、突然して耳に飛び込んできた。その瞬間、周囲の世界が再
び色づく

「えっ？」

不意に頭上から落ちてきた言葉に一夏はハツとして眼を開けた。そして気付く。田の世界にいたはずの自分はいつの間にか砂浜に佇んでいる……まさか海に落下したあと流され、打ち上げられたとでもいうのだろうか？ 時間の感覚が頼りなく、またここがどこかもわからない。一夏は自分の置かれた状況をまったく飲み込めずになった。

踏めば子氣味良い音を出す、白い砂浜。遠くから聞こえてくる穏やかな波の音。さあーと吹く小風と、それにのって運ばれてくる潮の香り。確かに、そこは海辺だった。しかしながらこんな場所に自分がいるのだろう？

「うううう、うー」

再び聞こえてくる声。それは少女のもののような無邪気なソプラノで、吹く風と同じテンポにメロディーを響かせる。一夏はその声が、ついたつ自分に投げかけられたのと同じものであるのに気が付いた。

声の先に目を送る。しかしそばには誰もいない。

一夏は耳をすまし、声の聞こえるほうを探つてみた。少女らしき声は未だ切れることなく歌い続けている。田では見つけることの出来ないその声の主を、一夏は耳を頼りに探しながら、その発信源である人物を目指してゆっくりと足を進めていく……

足の裏に一步いと伝わる砂の熱気と感触を感じて歩く。白い砂浜と青い海、コントラストの激しい風景に目の中がチリチリする。日差しがそれほど強いわけではないが、乱反射して飛び込んでくる光に思わず田を背ける。

ふと、一夏は不思議な感覚を覚えていた。心のどこかが引っかかる。何故か記憶の奥から、似たような映像がふつふつと蘇つてくる気がしたのだ。見えるもの、聞こえるもの、感じるもの。それら全

部が組み合わさり、パズルがだんだんと輪郭を形成していく。そして一夏は気付いた。まるで真剣衰弱のカードとカードがペアをつくるように、記憶の中のイメージと田の前に広がる風景とが等号する。（俺はここに来たことが、ある……？ そんな、まさか……）

その所見を核心のものとする『ある物』が、一夏の田の前に姿を表わした。

一本の長い流木。とっくに樹皮の剥げた表面が、長く晒された日差しに焼けて真っ白になっていた。

（そうだ、ここはあの時のつ！）

思わず手を打とうした瞬間、なぜか突然田の前で少女の声がしたのだ。

「相変わらず、欲張りなんだねー」

「えつ？！」

思いもよらないタイミングで声をかけられて驚く一夏は、視線を左右に投げて声の主を探す。すると、その様子を楽しむ小さな笑い声がすぐそばで聞こえた。足元に田をやるとそこにはまだ幼い面影を残す少女が膝を抱えてちょこんと座っている。白い髪、白いワンピース。まるで砂浜に同化するみたいな透き通つた肌が田に眩しい。

「あのつ、キミは以前にも……」

「クスクス……『めんねー。もつ、いかなきや。私の役目は君をここまで連れてくることだから』

「ちょ、ちょつと」

「バイバイ、いっく……」

見た目とは異なり少女の言葉は随分と大人びた口調だつた。戸惑う一夏がもう一度声をかけようとするが、少女の姿はもともとそこにはなかつたかのように忽然と消えてなくなつっていた。一夏はそれにただ呆然とするしかない。

そして辺りにはまた、さざ波の音だけが残る。ザザザー、ザザアー、……と。

一夏はしばらく砂浜を眺めていた。足元からゆつくりと、そして

遠くの方まで。見渡す限りの白が田にしつかりと焼き付くよつだつた。瞼の裏まで真っ白く見えるようだ。

少女の声はもう聞こえない。その姿もどこにも見当たらない。再び一人になってしまった一夏は、仕方なく近くにあった流木に腰を下ろそつとした。

その瞬間だ。強烈な映像の群れがフラッシュバックのよつに突然一夏を襲う。

鮮明な既視感に脳を揺らされたような衝撃が走った。慌てて一夏は視線を波間の方に向ける。そこに居るはずの人影を求めて……あの時も確かにこんな感じだつたと、一夏自身の記憶が彼に語りかける。

だが

「ち、千冬姉……？」

一夏は思わず怪訝な声を出してしまつた。そこに立つていたのは彼の記憶の中の存在とは全く別の人物だつたからだ。決して見間違えるはずのない、彼の唯一の肉親『織斑千冬』の姿。彼女は見たこともない白銀のIISを身に纏い、そしてじつと一夏の方を向いたまま佇んでいた。漆黒の色をした髪が、艶やかな光を放ちながら海風に煽られて泳いでいる。

「なんで千冬姉がこんなところに？ それにそのIISは、一体……」
呆然としたまま問いかける、一夏。しかし千冬はその問には答えず、ただ真っ直ぐに彼の目を見据えるだけだ。反応のない千冬に一夏はもう一度呼びかけようとするが、その彼の言葉は何故か別の誰かの声によつて遮られてしまつた。

届く声は女性のものだつた。が、不思議なことに辺りには他に誰一人として姿はない。それに正面に立つ千冬の唇は微動だにしてい

ないのだ。それなのに一夏の頭にはまるで黙示のように声が直接に響いてくる。耳が音を知覚しているのではなく、無理矢理脳が理解させられている。そんな違和感があった。

『 その身に力は残っていないのですか？ 仲間を守る力は、もうあなたにはないのですか？』

「 ? !」

その声は千冬のものとは異なる、柔らかな響きで一夏に訊ねて掛けってきた。自分に起る不思議な現象に一夏は再び困惑する。怪訝な表情で眼前の女を見据えるのだが、しかしその姿はどれだけ見返しても織斑千冬、その人にしか見えない。

「 力つて 千冬姉、一体何を言つてゐるんだ？」

『 あなたには守るべきものが有るのではないのですか。何故、それを守ろうとはしないのですか？』

「 えつ ? !」

『 あなたの持つその力は、なんのためにあなたの手にあるのですか？』

次第に一夏の表情が強ばる。

「 お前は 誰なんだ？！」

頭に響く声はそれには答えなかつた。

「 なあ、俺にどうしろと言うんだ。もう俺には何も残つてない。力も、希望も 。誰も守ることなんかできやしない」

『 どうしてですか？』

「 だつて、そうだろ？！ 白式のエネルギーはもうない。それに俺は絶対防御の眠りのなかだ。どうやつたらシャルを助けることが出来るつて言つんだ！！」

千冬の姿をした者はゆつくりと一度瞬きをする。

『 だから諦めた、と』

『 諦めたくて、諦めたんぢやない！ でも、救えなかつたんだ 頼むよ。俺は自分の一番大切な人すら守れない弱い人間だ だからもう、俺のことはほつといてくれないかな』

『手を伸ばしても、届かなかつた。足搔いても、助けられなかつた……あなたはたつたそれだけの理由で、簡単に大切な者を見捨ててしまつたのですね』

女は表情を変えることも、唇を動かすこともしない。しかし頭に届く言葉は、一夏の俯いた顔を再び険しくする。

「ふざけるなッ！　さつきから聞いてれば、一体どういうつもりで言つている？　それに何で千冬姉の顔をしているんだ？　いい加減、そんなふうに俺を馬鹿にするのはやめろッ！！」

一夏は砂浜に数歩足跡を付ける。人差し指を突きつけ、叫ぶ。それでも変わらぬ女の表情に一夏はさらに苛立ちを募らせる。ギリギリと奥歯がきしむ音が骨に響いて聞こえる。その音に割り込むように、頭に響く声。

『あなたが欲した力はそういう力だつたのですか？　あなたの思いや願いは力には成り得なかつたのですか？』

「……どういう意味だ」

『仲間を助けると言つていた　あの時あなた　は、とても強い思いの力に溢れていました。しかし、今のあなたにはそれを感じられません。まるで戦うことを避けているかのよつ……』

「そんなことはツ！　……そ、そんなこと……」

一夏の言葉は、そこで止まつてしまつ。

『世界の不条理と戦うのに結局あなたが振り回したのは、ただ田の前の相手に向かつていくだけの腕力なのです』

「ぐつ、ううう……」

『……思いはその強さと同じだけ翼を空に広げることができるのです。願いはその純度に応じて高く飛び立つ糧となることもあるはずです。あなたにはそれができる力　があるはず……。それに、あなたがしてきたその大剣を振り回すだけの戦いでは、世界の混沌を一部だつて取り除くことはできなかつたでしょ？　守りたいと強く、強く、強く思わなければ、あなたが願う本当の意味での　仲間を守るための力　を得ることなどできないはずですよ』

そして女はすつと一夏に背中を向けると、真つ青な海に目を送る。そして一夏に背を向けたまま言つのだ。

「この世界は広く、現実はお前の目に映らないものばかりだ。それでも尚、お前は眞を守りたいと言つのだ」
未熟者には荷が勝ちすぎた願いだな

「何ッ？！ 千冬、姉……」

「ならば強く願うしかないだろ」

突然変わつた声色が一夏の耳に届く。凛と張りのあるアルト。意志の強さを感じさせる言葉あり。その特徴的な口調を彼が聞き間違えることなどない。

「目の前の現実を知つて尚真つ直ぐに進む心の強さを。必ず守ると、最後まで貫き通す思いの強さを。手が届かなければ、『それでも必ず届く』と信じ切る意志の強さを。それしかないお前の、だが唯一誰にも負けない強さを失わないことだ」

「それって、一体、どうこいつ……」

聞き返そうとした一夏の瞳を、肩から覗く漆黒の目が制止した。

「もう、行くのだろ」

「ちよ、千冬姉っ」

「守るべきモノがあるので」
ぐずぐずするな未熟者が……

そう言つた千冬の目が少しだけ笑つた気がしていた

アラートの甲高い音がけたましく頭の中に響く。
現実感のない白の世界の終息と共に、肌を打つ風のしなりを感じる。

ついわたり今まで穏やかな浜辺がまるで嘘だったかのような、荒れる洋上に一夏は佇んでいた。

気が付いた彼の前には、一面の空と海。目の前に広がる映像と頭の中にたしかに残る映像、その二つが上手く結びつかないでいる。未だ自分に起こっている事態の変化についていけない頭が、何を現実と受け止めていいのか困惑していた。バラバラと辺りに散った記憶の断片を集め、今の自分を再構成しようと尽くそつと、活性化していない脳の稼働をその一点だけに集中しようとした。しかし突然の大声で横やりが入った。

「一夏ッ、無事なのか？！　ああ……心配をかけおつて、この馬鹿者が」

「……ラウラ、なのか？」

チャネルを開いたラウラの顔が、普段より色を失っていた。一夏はそれが不思議に思えていた。

「んつ、どうした、何かあったのか？　声の調子がいつもと違うようだぞ」

「なんだか……よくわからないんだ。エネルギー切れになつて、海に落ちたはずが……浜辺に千冬姉がいて……」

「教官がどうしたというのだ？　言つている意味がよくわからんぞ」「ああ、だからエネルギーが、……ツ？！」

その自分の言葉で始めて気付いた事実に、一夏は言葉を失つた。怪訝に思つたラウラが呼びかける。

「どうした、一夏？！」

「なんで……だ？　白式がエネルギー・ゼロなのに、稼働している「なつ？！」

白式のハイパーセンサーに表示されているパラメーターには、確かに『ゼロ』と出ていた。しかし白式は未だに稼働したまま、待機モードに移行する気配はない。

「…………理由はわからないが、何か白式に変化があつたのだろうか？」一夏、今の白式の状態でシャルロットの元には行けそうか？」

一夏はハツとなつた。そのラウラの言葉で、曖昧だつた現実が、たつた一つの事実のみに限定される。なによりも優先すべきことがあつたのに、一夏は気が付いた。

「シャルツ！ そうだ、俺はシャルを……助けに行くんだ」

「大丈夫なのか？」

「当たり前だ。必ず、俺がシャルを守つてみせる！ 絶対にあいつを助け出すんだ！！」

その瞬間だ。

白式のハイパーセンサーのパラメーターが急に光り出した。そして、エネルギー表示に変化が起こる

パラメーターのエネルギー・ゲージが一気にMAXまで上昇する。スラスターが小さくバックファイアを吐き出したのがわかつた。一夏は白式全体に激しいエネルギーの対流が起きているのを感じていた。

「なんだ、白式……一体、なにが起こってるんだ？」

まるで息を吹き返したかのよつた自身の機体に不思議を感じ、一夏は機体状況の確認のためセンサーに目を走らせた。そしてセンサー上に驚きの情報を見付け、一夏は思わず声を上げてしまった。

「い、イチつて……エネルギー残量『1』つて、どういうことだ？」

数値上『1』であつてもゲージの方は振り切る勢い。幾つかデータを引っ張り出し、また白式のOSをチェックしてみるが、そもそもそういうことに明るいわけでもない一夏にその謎の解明など出来るはずもない。

ただ、理解はできなくても体の方がわかつていて。今にも暴れ出しそうなくらい、白式のパワーが溢れている。ゲージが『1』なのは何故かわからなくても、それが風前の灯火でないことくらい、感覚が教えてくれていた。

まるで共鳴しているのだ。飛ぼう、と。シャルロットを救い出そう、と。

それは今まで感じたことのない感覚だつた。白式と自分が全く同じことを思考しているかのような、意識の共有を思わせるつながりが彼とESの間にあるのだ。

「白式……」

一夏は自分の右手を握り締める。当然、白式の右腕のパーティも同じ動きをするのだが、これまでと今との違いは歴然だつた。いうなれば、それは他人の『体』と自分の『身体』くらいの感度の差があつた。そしてみなぎる力は白式からだけではない、自分自身も同様

に溢れる力を抑えるのが難しいのだ。思考だけではなく、すべてが相互にリンクし合う。ISに對してそんなふうに感じたことは、今まで一度もなかつた。

だからか。

一夏は白式から流れ込んでくる意志のようなものを、自然に受け入れることができた。

「……行けるんだな、白式」

一夏は自分の機体に問いかけるように言った。

「頼む、白式。シャルを救うために……お前の力を貸してくれ」

一夏の言葉に呼応するように、ハイパー・センサー上に幾つものファイルが展開される。新しいデータが表示され、インストールと更新が繰り返された。やがて画面に白式の新しいスペックがセットアップされたのが示される。そこには『鏡枢 かがみくるる』の文字。簡易マニュアルにはイグニッショング・ブーストのサポートシステムと記載が出ていた。

「『鏡枢 かがみくるる』、これが俺と白式の新しい力か……」

念のためスペックデータに目を走らせる、一夏。だが本当はそんな必要もなかつたのだ。どう使うのかも、どう出来るのかも、勝手に頭が知覚している。おそらくは、白式が全てを彼に伝えてくれているのだ。

一夏はセンサー上に表示していたファイルを一斉に閉じる。そして視線を目標す方角に向けた。シャルロットを救い出すために。

「行こう、白式！」

一夏が鏡枢の稼働を指示すると、バシュウと音を立てて白式のウイングユニットが前方に小型の菱形状のパーツを射出した。パーツは一夏の正面空中で一旦停止すると、真ん中から十字に弾けるようにページされ、四分割して飛び散つた。

「鏡枢、俺をシャルのところに連れて行つてくれ！」

一夏が呼びかける。すると今度は分散した四つの各パーツからレーザー上の光線が発射されて、パーツ同士をその光線が繋ぐ。まる

で大きな窓のような、光の枠が出来上がった。

(シャルツ、今、助けに行くからな)

白式のスラスターが唸りを上げた。激しい爆音、そしてキンキンと高熱になつた金属が甲高い音を上げる。それに呼応するように目の前の光の枠がさらに強く発光した。そして次の瞬間、その枠内全体にカーテンを引いたような輝くフィールドを展開する。それは一見すると姿見の鏡のような、大きな光の壁となつた。一夏は小さく頷くと、躊躇わざその壁を目指して飛び出した！

「いけえーツ、イグニッショーン・ブースト！」

スラスターがノズルを絞り、前方への推力を爆発させた。白式が最大加速で飛び出し、鏡枠の光の壁に突つ込んだ。壁はガラス窓を突き破つたように派手に粉碎して、その光の破片はバラバラと海上に散つていく。

そして光の破片全てが海上に落下したあとの空には何も残つていなかつた。

白銀のEISは跡形もなく消え去つたのだ。

「簪、もう無理。やめたほうがいいわ」

チャネルに呟く鈴の声が聞こえ、簪は唇を噛んだ。新・山嵐の発射口を閉じ、見えもしない海上を仰ぐ。直接見ることはできなくても、状況は明らかだ。

作戦は失敗した。シャルロットを救い出す手立てはもうない。

沈痛な面持ちで、それでも簪は海上を目指し浮上を始めた。上がつていつたところで何もできるはずがないのだが、何故かそうしないといけない情動に駆られていたからだ。或いは親友の顔を最後にもう一度見るためだろうか。そんなふうに考えたくはなかつたが、

頭の中に湧くネガティブなイメージを容易に振り捨てるほど、彼女の精神は強くなかった。

その時だ。

「エッ、ちょっと何が起こったんですの？！」

「嘘でしょ？ だってセンサーには何の反応も……」

鈴とセシリアの驚きがチャンネルを通して伝わってきた。怪訝に思つて様子を確認しようとするとよりも早く、二人の声は驚きから歓喜へと変わつていぐ。

そして彼女達は叫んだ。

「――夏ッ――！」

簪は慌てて浮上速度を上げた。日差しの乱反射する海面を日指し、そして波の壁を突き抜けて洋上へ飛び出す。髪を滴る水と突然変わつた陽光のコントラストがきつくて、思わず目を細めた。視界の真ん中に白く輝く強い光があるのに気づくが、明るさに目がなれないために直視できない。それでもなぜか感じた、温かさと安心感に口元が柔らかくなる。

やがて瞼を開けられるほどに目がなれると、ついついと映つたその存在に彼女も歓喜の声を上げる。

「……夏――」と。

ほんの目と鼻の先の空間が突然弾けたのだ

プラチナの閃光が視界を覆つたのだ

後ろ手に縛られた体を甲板に必死に押しつけ、大きく左右に揺れる甲板から振り落とされぬように歯を食いしばつていたシャルロットのその瞳に映つたのは、天馬のような雄大な翼を広げた姿。

ついさっきまで絶対に諦めないと誓つていたのに。今が無理でも、必ずもう一度再会すると強く心に刻んだところだつたのに。みんなの頑張りに心から感謝して、ちゃんとお別れするつもりだったのに。（こんなのするいよ……僕の決意、全部無駄になっちゃつたじゃないか……）

シャルロットは拘束された身に頬をつたう零を拭うすべがないのに気付き、悔しくつてもうちょっと泣いた。

「シャルツ、来い！！」

差し出された腕の中に飛び込むのは容易い。どんなに世界が激しく揺れ動こうと、まだどんなに離れていようとも、必ず受け止めてくれる人なのだ。ただ自分は身を投げ出すだけでいい。シャルロットは迷わず膝を立てると、弹けるように甲板を全速力で疾走する。

「貴様あ、逃がすものかー！！」

背後に男が構える気配があつた。ただ、もう彼女は迷わなかつた。走る。走る。走る。

「鏡枢ツ！」

一夏が男に向かつて何かを射出した。もう、それで彼女には十分だ。守つてくれる。だから背後で轟音が響いても恐怖はなかつた。鉄の塊を最後の一歩、右のつま先が蹴る。不安定な場所からのジャンプはすぐに重力に捕まつて海面に吸い込まれそうになるが、それより先に待つていたモノがちゃんと受け止めてくれた。

「大丈夫か、シャルツ！」

覗き込んできた目をまともに見られないくらいに胸がいっぱいだつたから、すぐに瞳を閉じて身を乗り出した。

「おい、シャ……」

重ねたはずの唇に一夏の感触が無くて気付く。声を出せないよう
に貼られていたテープがあった。またちょっと悔しくってシャルロ
ットは、今度は大粒の涙を流した……。

「くつりつりおおお——！」

男の叫び声が響き、すぐにその声をかき消す轟音が耳をつんざく。甲板が地響きのような揺れを起こし、発射口が慌ただしく開くや何発もの弾頭が発射音と共に顔を出した。

一夏は雪片式型を握る手に力を込める。

「一夏さんツ」

「一夏あ！」

セシリアと鈴の叫びは、だが間近で放たれたミサイルより先に的確な情報を一夏に届けることなど出来はしない。簪の方は声を発する前に咄嗟の反応で新・山嵐を打ち出していた。しかしこちらとタイミング的には初弾の迎撃には間に合わないのだ。険しい表情、歯を食いしばる簪。

「鏡板つ——！」

しかし、一夏は動じない。素早く前方に鏡板を数機、発射する。最短距離でミサイルに向かっていく鏡板。

「ダメよ、一夏！ 撃ち落としちゃダメツ、避けてえ——ツ——！」

鈴が必死で叫んだ。彼を助けようと、もうほとんど機能の死んでいる状態の甲龍で飛び出そうとして片側しかないスラスターを開くが、そんな機体を飛ばすのは容易くはない。あえなくバランスを崩してしまつ。

狙いを定めた鏡板がミサイルに向かって接近する。だが次の瞬間、撃ち落とすかにみえたそれは、直撃の寸前に空中でぴたりと停止した。そして各機が先ほどまでよりさらにワイドに展開すると、今度は輝く光のカーテンを空中いっぱいに広げた。

光彩の窓掛は飛来するミサイルの雨を浴びて、割れた薄ガラスのように粉々に飛散する。そして次の瞬間

ドドドーンツツ――

激しい轟音と共に爆発が起こった。

しかし何故かそれは一夏達の頭上遙か上空に、眩い閃光の塊を幾つも作り出すのだ。鈴達の目にはそれが間違いなく先程のミサイル攻撃と同じ閃光だとわかつた。

「ええっ？！ な、なんであんな上で……」

「一体、なにが起こったのですの？」

鈴とセシリ亞が驚きの表情で空を見上げたまま、理解不能な光景に声をもらしていた。山嵐のマルチロットクオン・システムを起動しながら目の前で起こったことを解析しようとする簪にも、事態は理解できない。

一夏を狙つたミサイルは、彼が放つた見たこともない兵器によつて確かに迎撃された筈なのだ。だが現実、それは何十キロも上空で爆発していた。あの一瞬で一体どうやつたらそんなところまでミサイルを吹き飛ばせるのだろうか？ 潜水艦から発射された追撃のミサイルを、間髪入れず新・山嵐のミサイルで撃ち落とす簪は頭を捻る。

しかし、驚くべきはそれだけではない。

その時すでに白式は、先程までいた場所から忽然と姿を消していった。そして気が付けば回り込むように潜水艦の艦尾の方に移動している。センサーが捉えきれないほどのスピード。なのにイグニッショングースト時のような大きな大きな予備動作はひとつもなかつた。

「うおおおお――つ！」

振り上げた雪片式型が甲板を切り裂き、発射口を次々に破壊していく。

あつという間の出来事だった。一夏の振りかざす剣撃が、艦の武装をひとつ残らず沈黙させていった。それは圧倒という言葉に相応しいものだった。とはいえ懷に入り込んでしまえば、潜水艦などEISの相手になるはずもないのだが。

自分の艦が蹂躪されていく様をただ呆然と見てゐるしかない男は、甲板にへたり込み、追い詰められた恐怖と抵抗出来ない口惜しさに歪む顔で唇を噛み締めている。くしくもそれは先程まで自分がシャルロットにしていたことと同じだということに、だが彼は気付きもしない。違うのは、その目が次第に望みの光を失つていくことだけだ。

そして白式が右手の雪片式型を突き付けると、遂に諦めたのか男は首を頸垂れた。

その姿を目にし、鈴達の疲弊した顔にもよつやくホッとした表情が浮かんだのだった。

「簪、お願い。手伝つて」

一夏の手によつて拘束から解放されたシャルロットは、痛々しく腫れた唇を動かし簪を呼んだ。殴打されたあとは瞼や額にも痣を作つていたが、気遣う一夏を押しとどめ、彼女はすぐに動き出していた。

その間に鈴、セシリアは投降させた潜水艦のクルー達を拘禁するため艦内に移動していた。一夏は後ろ髪をひかれるような思いながら、シャルロットがみせる無言の笑顔の力にそれ以上の言葉を失い、止むを得ず鈴達の手伝いにまわる。

彼の背中を見送つたあと、シャルロットは自身の状況についてわかつてゐる全てを簪に説明し始めた。

「モアナーが展開しないのは、OSに感染させられたコンピューターウィルスが原因なんだよ。なんとかしないと……」

「……でも、OSのOSを侵食するようなウィルスを、一体誰が……作れるの……」

空間投影ディスプレーを何枚も展開し、待機状態のモアナーから有線でデータを引き出して解析する簪が、怪訝な表情でシャルロッ

トに訊ねる。しかしその問いにシャルロットは答えることは出来ない。

「それは僕にもわからないよ。あいつら、ウイルスの感染はモアノーの製造段階に行なつたと言つていたけれど、ISの開発に関しては他国に遅れをとるフランスにそんな技術があつたとは思えないんだ……」

小さく首を振つて言つ。簪の指摘は、シャルロットに新たな疑念を産む。

「多分、この件にはもつと他の人間が関わつてている気が……」

「ISの……知識や技術に優れた人間なんて……限られている」

「うん、こんな大それたことをできるのはひと握りの人間だけだからね」

そう言つて頷いたシャルロットの顔が、何故か急に表情をなくした。

「違う……ひと握りなんかじゃない……」と彼女の口から一言溢れる。小声でかすれたその音が、シャルロットの胸の内を表していた。気付いてしまつた可能性に彼女は動搖していたのだ。しかも、その可能性は決して低くない。むしろそうであればほとんどの疑問に説明が付くのだ。

シャルロットの様子がおかしいのに最初に気が付いたのは、すぐ隣りにいた簪だった。

「……どうしたの、シャルロット……」

作業の手を止め振り向くと、簪の小さな体は下からシャルロットを覗き込んだ。怪訝な面持ちで見上げたそこには、こわばらせた表情の彼女がいた。

「簪……、ISのコアに関わるOSに關』できて、その知識や技術に優れた人物つて……ひと握りもいないよね？」

「えつ？」

「だって、コアのプロトコルを理解できている人間なんて、世界でたつた一人しかいないよ。でも、そんな……まさか……」

「シャルロット……一体、何を……言つてゐるの？」

そこに潜水艦のクルー達を艦内の一室に拘禁し終えた一夏達が合流してくる。三人とも機体は待機モードにしてISIスース姿でシャルロット達のもとに駆け寄ってきた。

「どうしました、なにか異常がありまして？」

二人の様子に、敏感に何かを感じ取ったセシリ亞が声をかける。その声に答えようとシャルロットが振り返ろうとした時だ。

突然、ブュウウンッと低い音をたて、上空から『何か』が落下してきたのだ！

猛スピードで落下してくる『何か』は、一夏達がその正体を見極める間もなく目と鼻の先の海面に激突し、その衝撃で海水を数mも巻き上げた。

「キヤーッ！…」

「うわあーっ！」

潜水艦をかすめ、激しく海面に衝突した飛来物は、ひとつだけでは終わらなかつた。間髪いれず、幾つも幾つも断続的に落下してくる『何か』が海面を打ち、その衝撃波が続く。それによつて起つた不規則な大波が艦を激しく揺らした。甲板に集まつて了一夏達は揺れ動く船体にしがみつきながら、必死で荒海に放り出されないようにするのが精一杯だつた。

「な、何よ、一体ッ？！」

「くそつ、みんな、大丈夫か？」

状況がまったくわからず、慌てる一夏達。

しかしその中でただ一人、飛来物の正体に気付いた者がいたのだ。

「撃ち落としなさい、ブルー・ティアーズッ」

セシリ亞・オルコットである。

彼女は既にブルー・ティアーズを展開していた。そして呼び掛けに応じたビット達が一斉にセシリ亞の指差す空に向かつて飛翔していく。先程の戦闘の傷跡を深く残す機体は、短い待機時間の間では大した自己修復もされてはいない。しかし、そんなことはおくびに

も出でず昂然するのが彼女だ。

さらに飛来する『何か』。

それをブルー・ティアーズのBTビームが狙い打つ。

空中で起ころる幾つもの激しい爆発。しかしその飛来物の中の幾つかは、なぜかブルー・ティアーズのビームを回避するように曲がったのだ！ そして、まるで獲物を狙いましたかのように一夏達を目掛けて落下していく。

「ティアーズつ！！」

セシリアが寸前でBTビームを最大稼働させ、落下軌道を曲げる謎の飛来物を偏向射撃で撃ち落としていく。危機一発のピンチを彼女の機転で回避した面々だが、しかしその表情に安堵の色はなかつた。一様に険しくした顔が上空を仰ぎ、おそらくそこにはいるだろう対象を探しているのだった。

「一夏さん。お気付きでして？」

「ああ、わかつてゐる……」

セシリアの問いに、一夏は小さく頷いた。彼は素早く白式を呼び出し、その身に纏つ。

機体の損傷が激しいためか、鈴の呼びかけに対し甲龍は反応しない。彼女は悔しそうに唇を噛みつつ、足手纏いになるのを避けるために後退した。そしてそれはシャルロットも同様だ。そんな鈴とシャルロットを背中に庇うようにして、打鉄式式を展開させた簪が前に立ち尽くす。

BTビームが空中に巻き起こした爆煙が次第に晴れていく。そしてその先の上空に光るネイビーブルーの物体が姿を表す。

「サイレント……ゼフィルス……つ！」

セシリアの嘔み潰したような低い声が、その名を呼んだ。

一夏が声をかけるより先に、セシリ亞は飛び出してしまった。

それも仕方がない。彼女にしてみれば出処を同じくし、そして強奪されてしまった『母国の機体』だ。それに操縦者との因縁も浅からない。本来、接近戦向きではないブルー・ティアーズにも拘らず白兵戦を挑もうとしてしまったのは、頭に血が上ったからか、それとも先程の戦闘で失ってしまったビットの火力を補うための選択か。しかし間髪いれず一夏は鏡柩を放ち、セシリ亞を強制的に簪のいる場所まで転移させてしまった。

「……えつ？」

「なつ？！ 一体、ビうじうことですか！ わたくし、……なぜこんな場所に？」

最大加速での上昇。サイレント・ゼフィルスに迫るも、突然、空が遠くなつた。

まったく経験したことのない事象に、セシリ亞の困惑は明らかだつた。それは簪も同様で、急上昇していつたブルー・ティアーズがいきなり視界から消えて、次の瞬間には自分の隣に移動していたのだ。

気配など感じなかつた。センサーも捉えられなかつた。当然、彼女も表情を固くする。

「セシリ亞。その損傷では無理だ、援護にまわってくれ」
ゆっくりと白式を飛翔させる一夏が、セシリ亞に向かつて短く言った。もちろん気の強い彼女は、その言葉に簡単には頷けない。

「一夏さん、後方支援なんて願い下げでしてよ。わたくし、やれますわ！」

しかし、一夏は彼女を鋭く睨まえる。その意志の強い瞳に思わずセシリ亞も「うつ、ぐ」と躊躇わずにいられなかつた。

「セシリ亞、簪。鈴とシャルを頼む」

「……了解……」

「ううう……もう、わかりましたわ！ こちらは大丈夫ですから、

行ってくださいまし」

二人の返答を聞いた一夏は、いつも通りの明るい笑顔で親指を立てて飛び立つていった。その背中を見送りながら、セシリ亞は残っている8機すべてのブルー・ティアーズを展開して、いつでも一夏の援護をできるように準備する。

「なによ、アンタ。珍しいわね」

「うん、僕もセシリ亞にしては随分聞き分けがいいような気がする」
そんな鈴とシャルロットが言った言葉が彼女の耳に入る。妙に反応したせいか、セシリ亞は思わず声を張り上げてしまつていった。

「い、一夏さんの指示が、て、的確だったからですわッ！ まつた
く……いちいち絡まないで下さいましっ！」

肩越しに振り返った横顔で反論するが、思った以上に声が大きくなつてしまつて自分で驚いた。そのことと、もう一つの理由で彼女は下にいる一人に顔を見られたくないと思つた。わざとすぐに上空を見据えるふりをしたのは、そんな自分の心情を見透かされないようにするためだ。

「……セシリ亞、どうしたの？……顔が、赤い……」

しかしそんな彼女の事情は、ハイパー・センサー越しの簪には伝わらなかつたようだ。

「う、うるさいですわね、簪さん！ い、今は戦闘中でしてよつ」

裏返つたり、ひっくり返つたりする声で反論するも、今度は下の二人からくつくと笑うのが聞こえてくる。

「セシリ亞、アンタ、一夏に……」

「ああああっ、もう！ 絶対、絶対、違いますわ！ 鈴さん、いいからあなたは何処かに隠れていてくださいましっ！…」

「あの……今は戦闘中だよね」

「ず、ずるいですわ、シャルロットさんは、特にこの件に関しまし

ては、あなたの発言権は一切認めたくありませんわ！ もう、お願
いですから戦闘の邪魔にならないように引っ込んでいて下さいまし
ツ！」

そう言つとセシリアは、一人の声が届かないくらいの距離まで上
昇してしまつ。それはただ、色んなこと言い当てられた恥ずかしさ
に真つ赤になつた頬を、少なくともあの一人には見られたくなつ
たからもあつた。

（一夏さんの、馬鹿……。あんな真剣な顔を見せられたら、わたく
し、どうしたらいいかわかりませんわ……）

戦力的にはこちらが上でも、皆一様に消耗は激しい。セシリアは
気持ちを切り替えようと、赤くなつた頬をペシペシと叩く。そして
もう一度見上げた空では、白式とサンレント・ゼフィルスの戦闘が
すでに始まつっていた。

「ティアーズ達、行きますわよ」

セシリアが呼びかけると、彼女のナイト達はその指示を待つてい
たかのように空へ飛んでいく。

「一夏さん。わたくし、あなたの那個フリーストなどいら、嫌い
じゃありませんわ」

そう呴いてから、彼女は大きく深呼吸する。そのたつたひとつ
動作だけで、セシリアはぐつと集中力を高めてしまつのだからす
い。刹那、ブルー・ティアーズ達が途端に動きの質を変えた。そし
て一夏を援護するべく、サイレント・ゼフィルスのビッグと激しく
やり合ひ出したのだ。

「……でも、オルコット家の女はいつだって『強い女』でしてよ。

守られるのは性に合いませんわっ！..」

セシリアの援護は的確で、一夏はまとわりつくサイレント・ゼフ
ィルスのビッグ群からよつやく抜け出すことができた。

「やつた！ サンキュー、セシリ亞」

「こちらは引き受けましてよー。」

「ああ、頼む。」

BTビーム兵器の攻撃は相性の良い雪羅のシールドモードをもつてすれば防ぐことは容易かつたが、サイレント・ゼフィルスのビーム全機の攻撃を凌ぐとなれば話は別だ。操縦者としては卓抜の技量を誇る『M』は、こちらの思考を読んでいるかの『ごとく攻撃を芽を摘みにくる。一筋縄の攻めでは近づくことも出来ない。

さらには新装備の『鏡板』。

鏡板は物質を転送する力を持つ兵器だ。そうはいつてもワープのように固定した座標に必ず移動できるわけではない。物体の侵入速度、それと一夏の『思い』の力が効果に深く関わっているようだつた。だが、まだその能力の全貌を一夏が理解したわけではない。その上、ぶつつけ本番の実戦投入だ。今の一夏ではまだ使いこなすレベルにはない。

鏡板の効果対象は『物質』に限定されている。弾丸は転移できても、ビームは転移できない。そして激しい戦闘の中、相手の鼻つ面に正確に飛び込める精度も今はない。

なかなか懐に入る機会が作れず、決定打である零落白夜を振るチヤンスも皆無だった。そんな切歎扼腕な均衡をやぶる福音が、ついに聞こえた気がした。

一夏は咆哮とともに駆ける。

「今だッ、白式！ 行つけええ！！」

一夏は鏡板を使った二段階のフェイントでMの注意を引き付け、そして素早く彼女の裏を取つた。

「もうつたあ、零落白夜ーーー！」

渾身の力を込めた一撃が、サイレント・ゼフィルスを捉えたかに思えた。しかし、相手はあのMだ。そう簡単にはいかなかつた。

「スター・ブレイカー・ザ・ソードッ」

迫る来る一夏の先手をかわし、続け様に薙ぐ零落白夜の切つ先を

すり抜け、突き出してくる銃剣の攻撃が一夏の動きを固くする。切り結んでもシールド・エネルギーを奪う零落白夜の剣撃を、防ぐのではなく出させない攻め。初動を妨げ、牽制するように、サイレント・ゼフィルスの攻撃が一夏を襲う。

零落白夜が思つように振るえない。イン・ファイトでも相手の方が格上だ。

「どうした、織斑一夏。その程度では私に一太刀も浴びせることはできんぞ」

「くつ！」

しかし、このとき一夏は冷静だった。このままでは不利と判断するし、接近戦の中に細かく鏡枢の空間転移を使って相手のスキを狙い出した。何度も重ねる瞬間移動にはどうやらMも手を焼くようだ。次第に一夏の動きがMの反応速度を越え、サイレント・ゼフィルスを追い詰めていく。

「うおおおつ！」

「出たり消えたりと、うつとおしい奴だ。いい加減にっ……」

一夏は素早く鏡枢を放つた。しかし今度のそれは自分の移動のためではなかつた。

零落白夜の攻撃を避けながら回避と後退をするサイレント・ゼフィルスの背後に、意表を突いた鏡枢の光のカーテンが展開した。

「なつ？！」

一瞬動搖したMの腹を、思い切り蹴り飛ばす。突然のことに回避の間に合わなかつたサイレント・ゼフィルスが、その勢いに押され、光を突き破つて姿を消した。

「でやああつ！」

一夏は自身の左脇、無人の空間に向けて渾身の力で刀を振るう。誰もいない、そのたつた今まで無人だった空間に次の瞬間、サイレント・ゼフィルスが空間転移から弾き出されてくる。

突然の事態に動搖するMの表情が、すぐに不可避の攻撃を察知して怒りに似た形相に変わつた。直撃を避けようと両腕が動くが、そ

の動きよりも一瞬早く、一夏の刃は彼女に届く。

「今度こそもらつた、零落白夜ーつ！！」

「しまつ、……ぐああ！」

そして遂に一夏の一撃がサイレント・ゼフィルスを捉えた。絶叫と共にMの表情が歪む。

ハイパー・センサーから専用機持ち達の歓声が聞こえてきた。一夏も無意識に口元がほころんでしまう。しかし、まだだ。すぐに気を取り直し、相手を見据えた。今、戦っている相手はこの程度じゃ終わらない難敵なのだ。

「はああっ……くくく、少しほんの歯応えがあるじゃないか。まあ、そ
うでなくては私の立場がない」

Mは苦痛に歪んだ顔をニヤリとさせて笑った。ダメージはかなり
のはずだ。しかし彼女の余裕を奪うまでにはいたらなかつた。

「無口なくせに、喋れば減らす口かよ。そういうの嫌われるぜ」

「ははは、同じDNAでもお前は口ばかりだ。織斑の家は女のほう
が強いな、一夏」

「…………？」

先程の一撃で形勢は圧倒的に自分の有利になつたはずだった。
だがMの口から突いて出たたつたの一言が、一夏の冷静だつた思
考をあつという間に凍らせたのだ。

「…………いや、一夏兄さん、とでも呼ぶべきかな？」

「…………な、に？？」

耳を疑うような言葉に驚いて、一夏は咄嗟に構っていた雪片式型を
下ろしてしまつた。

「ふつ、早速スキだらけだな」

動搖から生まれた一瞬のスキを突いて、サイレント・ゼフィルスのスター・ブレイカーがビームを放ってきた。反応の遅れた一夏は間一髪、雪羅のシールドを展開してなんとか防ぎきる。

「くつ……ど、どういう意味だ！」

「意味も何も、わからないのか？」この顔だぞ……ふふふ

Mの表情は変わらない。彼女の歪んだ笑顔は、元々そういった表情のようだ。実に醜悪な笑みを浮かべるのだ。謎めいた言葉もあいまって、一夏は胸を逆撫でされるような不快感に苛まれていた。煮え切らない答えに、思わず歯噛みした。

「ふざけたことを言つんじやないつ、俺の家族は千冬姉一人だけだ！」

「ふふふ……」

後退しながらスター・ブレイカーで牽制攻撃をしてくるサイレント・ゼフィルスを、一夏は追つた。しかし、なかなか責めに転じてこない相手に焦燥感ばかりが募る。焦つた一夏が鏡板を使って裏を取ろうとするが、今度はあっさりと読まれてしまい、逆にザ・ソードの一撃を食らってしまった。

「ガツ、……ぐう、あああ

「まつたく、弱いな。織斑家の面汚しが

「ぐ、う、うるさいっ」

振り払つようにならひだ零落白夜はスキだらけの大振りで呆氣なく払われ、さらに鼻つ面に派手に蹴りを食らつた。一夏は苦悶の表情で弾き飛ばされる。

「一夏あ！」

「一夏さんッ！――」

センサーから届く自分を気遣う声が、今の一夏にはまつたく耳に入つていなかつた。

Mの顔から不快な笑みが消えない。やり場のない苛立ちがどんどん募つていく。吐き出す息が激しく熱を帯びていく。

「家族が千冬一人だけと言つていたが……誰か忘れているんじゃないか？」

「なにつ！」

抑えきれなくなつた感情が叫びのよつに吐き出されてしまつ。頭では冷静にならなければと理解しているのだが、その頭の半分以上が真つ白になつていてもわかる。暴れ出しそうな自分を、一夏は力一杯に下唇を噛んでなんとかつなぎ止めよつとした。

「くくく、軟弱な精神だな、兄さん。現実を認める氣概は持つていいのか？」

「言つてる意味がわからないなつ！ 大体、そんなくだらない言葉で引っ搔き回そうとしたつて、俺の家族が千冬姉以外にいなつて事実は変わらないぜ」

「そうか……？」

サイレント・ゼフィルスの動きが急に止まつた。まるで攻撃の意志がなくなつたかのように構えていた銃を下ろしてしまつたのだ。しかし、あまりの無防備に逆に一夏は動けない。

「最近の子供は親の恩を恩とは思わないと言つが……くくく、お前も随分と親不孝な男だな」

「何を、言つて……」

「ふふふ、記憶になくとも仕方はないのか。名前だつて聞いたことはないだろ？ 父は一徳という名だぞ。そして母は千凪だ」

一夏はどんどんと思考が停止していくのを止められないでいた。目の前に見えるモノがまるで怪異の形に見えてくる。耳に入る音が鼓膜に張り付いて取れない。

「や、……やめる……」

そして今まで一番醜悪な笑顔を見せたMが、舐めるよつな視線で一夏を眺め、呟いた。

「そして私の名は織斑マドカだ。まさか、忘れないだろ？ 大事な妹の名だ……」

「ふつ、ふざけるなあああ……」

切りかかろうと振り上げた零落白夜の刃が、しかし突然光を失つてしまつた。

それだけではない。ハイパーセンサーが待機モードを知らせるかのように暗くなる。アラートが鳴り、パラメーター表示がゼロになつてしまつていた。

「なつ、こんな時にエネルギーが！ どうしたんだ、白式？！」
しかし、スラスターも推力を失い、からうじてP.I.Cの力で浮遊しているだけとなつた白式は答えない。

「くつ、くつ そおおーー」

一夏の無念の叫びが虚しく空に響く。それを見下ろすマドカの目は、もう笑つてはいなかつた。氷のようになつた視線が、一夏と白式を刺す。そして彼女はゆっくりとスター・ブレイカーを構えた。

「……終わりだ。死ね」

そう、眩いた時だつた。

「キヤハハハア、エエムちゃん！ ざあんねん、手柄はアタシが頂
いちゃうわよ！…」

突如、閃光が迫る。

そして光弾のように向かつてきた物体は、鋭く、真っ直ぐに一夏を貫いた！

「ガツ、ぐあああつ！…」

激しい衝撃が一夏の脇腹を貫く。そこに、一瞬置いて焼けるような熱が生まれる。

一夏が熱を持つた場所に視線を向けると、巨大な金色のスピアが自分の脇腹を串刺しにしているのが見えた。あまりの凄惨な映像に、それが現実の自分に起こつてていることとは思えない。しかし次の瞬間、逆流してくる何かが自分の中から込み上げて、無理矢理口をこじ開け吐き出していく。

「キヤアアツー——！」

「一夏、一夏あ！！」

一夏は、今度は自分を呼ぶ声がちゃんと耳に入っていた。しかし、その声はまたすぐに遠くなってしまう。体の力がガクッと抜けて、そのまま何処かに急速に吸い込まれていく感覚が彼を襲つたからだ。

しかし

「ぐわわわ、……うおおおつ……」

意識がそうしたわけではない。
思考だつてもう働いてはいない。

だが、吼えた。一夏は吼えたのだ。

「がああつ！」

鉛のように重たくなつた白式の機体を動かしたのは一体どんな力なのか、もう一夏本人にすらわからなかつた。ただ、穿たれた槍先を必死で何度も押し返した。そうするたびに、焼けた鉄を押し付けてような熱のような痛みが背筋まで駆け抜けたが、それでも一夏は力まかせにスピアを抜けたが、それでも一夏は

そして、急にズルツと嫌な音がした。

「かつ、は……」

スピアが抜けていったあとの一夏は、肺の中にたまつた空気を全部入れ替えるように何度も荒い息をした。すると、途端に腰から下が冷たい水に浸かつたように感じた。下半身がまるでただぶら下がつているだけのようだ。感覚がまるでない。

逆に脇腹のほうは、心臓がそこに移動したのではないかといいくらいドクドクと脈打つていてるような錯覚がある。見ると、白式の右足の装甲は流れ落ちる血で赤黒くなつていた。

「ナニよ、さつさと逝つちゃえばよかつたのにい

耳障りな口調が聞こえるほうに一夏はからうじて目を向いた。そして反射的に体は雪片式型を構えようとする。だが、エネルギー切られの機体に意識を保つのも精一杯の体では、防戦すらまともには出来るはずがない……。

そんなボロボロの一夏の視界を、突如飛び出してきた二つの影が大きく遮った。

満身創痍の一夏と白式を背中側に庇うようにして立ち塞がつたのは、ブルー・ティアーズと打鉄式式の一機だ。

「よ、よくも一夏さんを傷付けてくれましたわねッ！　このセシリア・オルコットをこれほど怒らせたのはあなた達が初めてですわ！」

「……絶対に、許さない！……絶対に許さない！！」

セシリアと簪の眼はそれまで見たどんな時よりも激しく怒りの炎をたたえて、眼前の一機のIISを鋭く睨ましたのだった。

「例のものは？」

鋭く睨みつけてくるセシリ亞と簪の視線を気にする様子もなく、マドカが短く言つた。

「もちろん、回収済みよ。ラファール・モアノーに感染させたウイルスの発病と増殖を記録したデータと、アンチ・IS兵器の実戦データ。……それに未知の兵器に悶え苦しむ十代のかわいい女の子達の悲鳴も、いっぱいね」

きひひつと不気味な笑い声で肩を揺らし、女は言つた。

「ああ。よくやつた」

そんな冗談ともつかないセリフにはまつたく意に介した様子もなく、マドカはあくまで無愛想に返事をする。

「まったく……アンタ、感謝しなさいよおー。なんでも男共にあてがうのは勝手だけれど、回収する身にもなつてほしいわあ。こんなもののためにアタシは、あんなオスばっかりで異臭のする中にずっと潜伏してなきやならなかつたのよ。ああ、体に豚みたいな臭いが染みついた気がするわあー」

カーキ色の装甲をしたISは金色に輝く長大なスピア以外に目立つた装備はなく、上半身にあたる部分こそ人型だが脚にあたる部分は4基のスラスターで形成された『半・人型』の独特なフォルムをしていた。一見、特殊な形状をしたその機体を、実際のところ『IS』と呼べるのかは定かでない。ただ、一夏を襲つたあの速度は絶対に油断の出来ないスペックだ。

操縦者の女は、長い金髪を腰の辺りまで届く三つ編みにまとめ、よく焼けた肌の色をしている。年齢は20代前半くらいだろうか。鼻の頭に皺を寄せて、ワザと不満全開の表情を作つてマドカにみせた。

「ふんっ、作戦を立案したのは私ではない。文句があるなら、スロールに言え」

「別にい。アタシは約束通り、桃の薰りの処女が入ったおフロを用意してくれれば、あのクソ女の作戦だらうがなんだらうが、ちやーんとやつてやるし。」

べりんと唇を舐め、ニヤツと淫猥な笑みを顔に浮かべる女。その表情をみたマドカは露骨に不快そうな表情をして小さく舌打ちをした。

「……用は済んだ。撤退する」

せう言い捨て、マドカはサイレント・ゼフィルスを反転させた。「はあ？！ ちよつと、エエムちやん。アンタ、何、言つてんの？」

しかし女は、マドカの言葉に激しく詰め寄つていく。

「自分ばかり好き勝手撃ち合つといてアタシにはお預けつて、おつかしくない？ アタシ、全つ然、遊び足りないわ。もつちよつとヤりしてよ？」

「必要な物は全て回収済みだ、ジャンヌ。作戦終了、撤退だ」

「アンタねえー、『ふざけんな』だわよお？ このまま帰つたら、アタシ、欲求不満で暴れちゃうかも。シャワールームをオンナノ口の血で汚したくなれば、前菜くらにはここで楽しんでおかないとお、ダメよねえ？」

ジャンヌと呼ばれた女は、醜く歪む口元に笑みの様なものを浮かべて、マドカを下から上に舐めるような下品な一瞥をしてみせた。表情こそ薄ら笑いのようみえるが、その実田は笑つていない。

「なんと言われても、アタシはこの子達とじやれ合いたいの。邪魔するんなら アンタでも殺すわよ？」

「チッ……今更止めても無駄なのだろう。もう、いい。好きにしろ」

そう言つとマドカは眉間に皺をつくり頭を抱えてしまった。

「Ooo。」このジャンヌ・ウエーブールちゃんと女の子の甘い時間を邪魔するのは、誰であつてもOooよお」

ジャンヌはニンマリと満足そうな笑顔をみせると、眼下のセシリアと簪にむらりと視線を移した。

頭上の一人のやうどりはセシリアと簪の耳にも入っていた。その内容から察するに、もつ一機のEISのほうもおそらく亡国機業であることは間違ひなさそうだ。

相手がこぞこぞを起こしている間にも、簪は敵のEISの解析に余念がない。データから類似する機体を検索し、そのスペックを予想する。初見の相手との戦闘においてもっとも重要なのは、情報収集と解析、そして予想だ。これが甘ければ、本当に呆氣なく勝負がついてしまうこともある。それくらいに未知の相手というのは大きなアドバンテージを持つているのだ。

「……セシリア、あの女の……EIS。イタリアのテンペスター・ドウ工……第三世代機の?型試作段階にデータ取得目的で造られた実験機……」

簪がプライベート・チャネルを使ってそつとセシリアに声をかける。

「ええ、わかつていますわ。でも、わたくしの知っているのとは、随分形が違う……特殊仕様でしょうか?」

「わからない……初期装備もあのスピアだけしか見当たらない……脚の代わりのスラスターも変。あれじゃ推力が強すぎ……EIS同士の戦闘には不向き……」

「でも、油断は禁物ですわ。一夏さんをこんなにした女、只者のはずはありませんわ!」

「…………うん…………」

二人は後ろにいる一夏の顔をちらりと見た。出血のせいか泥のような顔色をした彼は、力なく頃垂れたまま時折低く呻き声をもらしていた。絶対防御の力があるはずなのに、ここまで重傷を負わせる攻撃は驚異だ。

二人は表情を固くすると、すぐにまた頭上の二機に目を戻した。

数の上では同等でも、状況は圧倒的不利である。エネルギー表示を見ればイエロー。ノーダメージ且つ短期決着以外に、まず勝機は見いだせない。なによりも冷静な思考が要求されるこの場面で、しかしセシリアはどうしても穏やかではいられなかつた。さつきからこめかみの辺りで激しく脈打つ血流がうるさい、彼女はたつた一つの事しか考えられない。

「……ダメ、迂闊に飛び込めば……思つツボ……」

「わ、わかつてますわッ！ でも……でも、いつまでも一夏さんをこのままにはしておけない……！」

本当はすぐにでも治療したいが、迂闊に背中をみせるのも危険だと感じていた。

「……うん……わかつてる」

簪は頷くと唇を噛んだ。彼女にしたつてその思いがないわけではないのだ。

ただ、セシリアよりも幾分冷静なだけ状況が見えてしまつ。もしもこの場を自分達二人がなんとかできなければ、一夏だけではなく鈴やシャルロットも皆、全滅させられてしまうだらう。だからセシリアが熱くなればなるほど、自分は冷静にならざる負えないのだ。そうすると背中を冷たい汗がつたつしていく。したくもない悲観的な確率計算が頭をよぎつてしまつ。

「えつ、ど、どういうことですの？！」

急にセシリアが絶句し、さらには喉の奥から唸り声のよくな音を出した。すぐに表情は歯ぎしりが聞こえてきそうな凄まじい形相に変わつて、鋭く空を見据える。慌てて簪もその視線の先を追つた。すると頭上の二機のうち、サイレント・ゼフィルスが機体をやや後退させ、自分は手を貸さないことを暗に示したのが見えた。瞬間、セシリアのなかで張り詰めていた糸が、切れた。

「ば、馬鹿にしてッ！ その驕り、100倍の後悔にしてお返ししてやりますわ……！」

「ダメっ、セシリア……！」

簪の制止も聞かず、ブルー・ティアーズは猛然と飛び出していつてします。

動けない一夏を守るのと、このままではまず勝機のないセシリア。簪は咄嗟にどちらかを選択しなければならなくなる。

天を仰ぎ、そして彼女は飛び出した……。

離れていればその分、より戦局は客観的に目に入った。

「簪つ、セシリヤツ！　迂闊すぎる……そんなの罷に決まってるじゃないか」

「もうつ、あの馬鹿、ナニのせられてんのよ！　はあ……甲龍さえ動かせれば、あたしが行つてぶつ飛ばしてやるのにつ！」

シャルロットの悲痛な表情と、鈴が踏む地団駄。どちらも上空の二人に届くはずはない。

歯がゆい思いで見つめる先ではすでに激しい戦闘が開始された。ビームビットとミサイルビットが獲物に迫る狼の群れのように動き回る。しかし、その獲物の速度たるや規格外だ。明らかにヒット・アンド・アウエイを戦法とした大きな旋回を繰り返すテンペスタ・ドウエの動きに、世界最高峰の高性能を誇るセシリヤのブルー・ティアーズですら後塵を拝す。追い詰めたと思えば大きく反転されてしまい、迂闊に飛び込めば鋭い一撃を食らう。セシリヤ達には相性の悪い相手だ。

シャルロットは自分の不甲斐なさに苛立ちを覚える。ここにいるみんなが自分のために傷付いていた。なのに、そのみんなを守るために自分は何一つ出来ないなんて。

彼女は待機モードのまま反応しないモアナーのネックレスを握りしめる。

戦いたい。そしてみんなを守りたいのだ。

だが、そんな彼女の思いはどうしたつてモアナーに届かなかつた。ウイルスの毒は未だしつかりと、シャルロットとモアナーの間に壁を造つたままだ。

無力さに瞼を伏せた。

「あつ、ああーつ！ 一夏のバカツ、早く避けなさいよ！！」

ふいに隣から慟哭のよつた声が聞こえて、シャルロットは落としていた視線を鈴が見る上空に戻した。その瞬間、顔から一気に血の気が引いた。

「い、一夏つ！ お願い、逃げてえーーー！」

精一杯叫ぶことはできても、必死に伸ばした腕が彼に届くはずはない。

我関せずを決め込んでいたサイレント・ゼフィルスのビットが彼を狙つても、シャルロット自身にはそれを止める手立てはない。躊躇いもなく放たれるビームの無情な発射音に、顔を背ける暇もなかつた。

「 ツ、ツ？！」

直撃は避けられないと思われたその瞬間。

そこに無理矢理体を入れてきたブルー・ティアーズが、一夏をビームの矢から守つた。ほとんど体当たりに近い勢いで白式を弾き出して斜線にねじ込んだ体には、ただ彼女自身を守るための余力はまったく残つていなかつた。嵐のようなBTビームの集中砲火を浴びてしまつたセシリアは、声も出すことができないまま呆氣なく白煙をあげて海へと墜落していつてしまつた。

「一夏つ！ セシリアル！ ……くううつ、あああああつー！」

鈴が悲痛な声を半ば強引に叫びに変えて、激しく空に向かつて吼えた。

「龍牙つ、一夏を！」

降下していく白式に向け、甲龍のワイヤーファングを部分展開して発射する。牽引するように潜水艦上に誘導し、無事着艦させたの

を見届けると、彼女は背中越しに「一夏を、お願ひ……」と託し艦首の方へと駆け出してしまった。

「アンタ達、絶対に許さないわッ！ 撃ち落としてやるつ。龍砲お

！…

もはや部分展開でしか戦えないとしても、たとえエネルギー切れでそれすらできなくなつても、内から湧き出す激しい怒りに体を震わせる鈴は戦い続けるだろう。そんなことを考えている場合ではないとわかつても、水火を辞さない彼女の背中がシャルロットの目には眩しく見える。

「シャル……」

「一夏つ、大丈夫なの？」

「ああ、なんとか……」

腕の中に力なくいる一夏を、シャルロットは見つめた。ホッとしたことで笑顔を作つたつもりが、目から涙が溢れてしまった。

「一夏、僕、自分が情けないよ。守られるだけで、誰も守れない……。やっぱり僕らはISがないと何もできない、ただの女の子のかな……」

拘束されていた潜水艦内での男からの言葉を思い出す。悔しいが、その通りに思える。

「そんな事……ない、ぞ」

「えつ？」

苦悶の表情を浮かべながらも一夏は、体を捩つてシャルロットの目を見ようとした。

「みんなが戦えるのはお前がいるからだ。必死に戦つて守るだけが、守る」とじやない……。守られるべきお前が、みんなが自分を必ず守り通してくれる信じているから……俺達はまた立ち上がれる」「で、でも……」

「お前の信じる心に、俺達だつて守られてるんだ。そりだろ？」

一夏がシャルロットを励まそうと作つてみせた笑顔は、とても笑みとはいえないような痛みに歪んだものだつた。一夏の体は限界だ

と、シャルロットは感じていた。少しでも負担を減らしたい、そう思い彼女は一夏の体を横にしようとした。しかし一夏は歯を食いしばって顔を横に振るのだ。

「シャル……」

一夏はあくまで体を起こしたまま、そしてシャルロットの首から掛かるペンダントに手をかけ、彼女をぐつと引き寄せた。それはたまたま彼女の体まで手を伸ばすには、傷の痛みが酷かつたからかもしれない。

そして今度彼がのぞかせた笑顔は、シャルロットが知っているいつもの彼の笑顔のようだった。

力なく形にしたその表情は、この緊迫した状況にありながらシャルロットの胸の内を沈めるかのような穏やかな水のひと雫のようだつた。彼女の瞳は、一夏の深い黒の瞳に吸い込まれた。

「でも、さ。守られてるだけも、ダメだよな。俺も、お前も……。こんなになつても、俺はみんなを、絶対に守りたい……」

「……うん。僕はもう誰かが傷つけられているのを黙つて見ているなんて出来ない！ だって、鈴だって……あんなに……」

「ああ、そうだよな……『守りたい』、そう思うだけじゃダメかもしれないけれど、思いがなければきっとそれは力にはならないから」「思いは力……うつん、思いこそが力……！」

シャルロットが伸ばした手が、一夏のペンダントに掛けた手を握り締めた。シャルロットの思いの分だけ、その手には力がこもる。目にためた涙の最後のひと雫が、その手に落ちる……。

突然、センサー上の白式のパラメーター表示がエネルギー残量の『2』を示したのだ。

途端に一夏の体を、さざ波のような衝撃が走った。

そのままその衝撃は、ついだ手のひらを通じシャルロットの体を走り抜けていく。

そして

一條の光も灯さなかつた彼女のセンターに、ついに『POWER

の文字が……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719u/>

The kissing under the mistletoe 戦場のもみの木の下で
2011年11月27日18時36分発行

IS学園、最後の